

立山町文化財調査報告書第6冊

浦田遺跡

——第2次発掘調査報告——

1988年

立山町教育委員会

序

立山町は靈峰立山を望む新川平野に位置し、県内有数の穀倉地帯として、産業面や経済面において重要な役割を担ってきました。しかし、この穀倉地帯も祖先の嘗々たる努力によって成ったものであり、その歴史を子孫に伝えて行くことはたいへん意義深いことであり、また我々の義務であるとも言えましょう。

このたび調査の行われた浦田遺跡は、東大寺文書に記されている莊園「大藪莊」の中に所在していたと考えられ、穀倉地帯としての立山町のいわば搖籃の地であります。しかし、これまでには「大藪莊」の存在は知られていても、実態は全く不明であります。

この報告書においては、昨年の調査成果もあわせて報告してあり、「大藪莊」の一端を窺い知ることができます。そしてまた、これは新川郡の古代史の解明にも貴重な手がかりとなるものであります。本書が地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際しご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝いたします。

1988年3月

立山町教育委員会

教育長 坂井市郎

例 言

1. 本書は、昭和62年度に立山町教育委員会が国庫補助金及び県費補助金をうけて実施した、富山県立山町浦田遺跡第2次緊急発掘調査の報告である。
2. 調査期間は、昭和62年8月3日から同9月11日までの延24日である。発掘面積は約300m²である。
3. 調査は、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典が担当した。調査事務局は立山町教育委員会におき、森が事務を担当、社会教育課長松井哲男が總括した。
4. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。また、調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して謝意を表したい。

秋山進午（富山大学人文学部教授）、宇野隆夫（同助教授）、岸本雅敏・池野正男・酒井重洋・宮田進一（以上富山県埋蔵文化財センター）
(順不同・敬称略)
5. 遺物整理、実測、製図は森・北川美佐子（立山町教育委員会臨時調査員）が中心となり、小田木治太郎・田島富恵美（以上富山大学学生）が参加した。
6. 本文は、III-3-(3)・(4)とVIを北川が、その他を森が分担して執筆した。

凡 例

1. 遺物実測図中のスクリーントーンは、次のことをあらわす。



赤彩

目 次

I 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
II 調査の経過	1
III 調査の概要	5
1. 立地と層序	5
2. 遺構	5
(1) 弥生時代後期の遺構	5
(2) 平安時代の遺構	6
3. 遺物	12
(1) 縄文時代の遺物	12
(2) 弥生時代後期の遺物	13
(3) 平安時代の遺物	15
(4) 中・近世の遺物	17
IV まとめ	18
V 考察	20
1. 弥生時代後期の遺構について	20
2. 古代の掘立柱建物について	23

註

写真図版

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 地形と区割図	3
第3図 遺構全体図	4
第4図 遺構実測図	5
第5図 遺構実測図	7
第6図 遺構実測図	9
第7図 遺構実測図	11
第8図 遺物実測図	12
第9図 遺物実測図	14
第10図 遺物実測図	16
第11図 遺物実測図	17
第1表 昭和62年度検出掘立柱建物	19
第12図 第1・2次発掘調査区遺構全体図	21
第13図 畦田の一例	22
第2表 昭和61年度検出掘立柱建物	23
第14図 遺構実測図	24
第3表 富山・石川両県の古代掘立柱建物の平面プラン	26
第15図 a・b類建物小群配置図	27
第4表 2間×2間建物の構造と面積別分布	28
第16図 1~4類建物小群配置図	29
第17図 地区分図	31
第5表 梁行2間以上建物の面積別梁行総長の傾向	31
第18図 昭和61年度調査区出土遺物実測図	35
第19図 昭和61年度調査区出土遺物実測図	36
第20図 昭和61年度調査区出土遺物実測図	37
第21図 昭和61年度調査区出土遺物拓影・実測図	38
第22図 昭和61年度調査区出土遺物実測図	39
第23図 昭和61年度調査区出土遺物実測図	40
第6表① 昭和62・61年度出土弥生土器・古式土師器観察表	41
第6表② 昭和61年度出土弥生土器・古式土師器観察表	42
第6表③ 昭和61年度出土弥生土器・古式土師器観察表	43

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山县の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県に接し、東西約43km、南北約21km、面積は308km²を測る。

地勢は、三角洲や扇状地・河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらに山岳高地におよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4区分できる。¹⁾

標高400m以下は、暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに統いて標高600~700mまでは、暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の生育帶で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場でもある。

さらに標高1,500mまでは、ブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

今回調査を行った浦田遺跡の所在する町北部地域は、常願寺川扇状地末端部の湧水地帯にあたり、柄津川や白岩川等の中小河川が流入して、三角洲・小支谷・自然堤防などによる複雑な地形を呈している。

この様な地形の中で、遺跡は柄津川左岸の微高地上に立地している。また、遺跡の西側には小支谷があり、今回の調査区はこの小支谷に隣接した部分にあたる。

周辺には、縄文時代から中・近世に至る多数の遺跡が存在するが、特に弥生時代以降その数が増す。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った浦田遺跡に関連があるものとしては、江上A・B遺跡(弥生中期~古墳)、東江上遺跡(飛鳥・奈良)、中小泉遺跡(弥生中・後期)、正印新遺跡(弥生中期~古墳)、日中源兵衛腰遺跡(弥生後期~古墳前期)、辻遺跡(弥生後期~古墳前期・中世)、利田辻入遺跡(弥生中期)、塚越遺跡(弥生後期~古墳)、鉢ノ木遺跡(弥生後期~古墳)、稚児塚古墳、塚越古墳、藤塚古墳、利田横枕遺跡(平安前・中期)などがあげられる。また、若干前に離れてはいるが、須恵器生産地である上末古窯跡群も、関連遺跡として重要である。

II 調査の経過

浦田遺跡の発見は、昭和47年家屋新築に際して弥生土器が出土したことを契機としている。しかし、遺物包含状況など遺跡の性格は近年まで一切不明であった。『立山町史』には浦田竈氣遺跡と記されている。

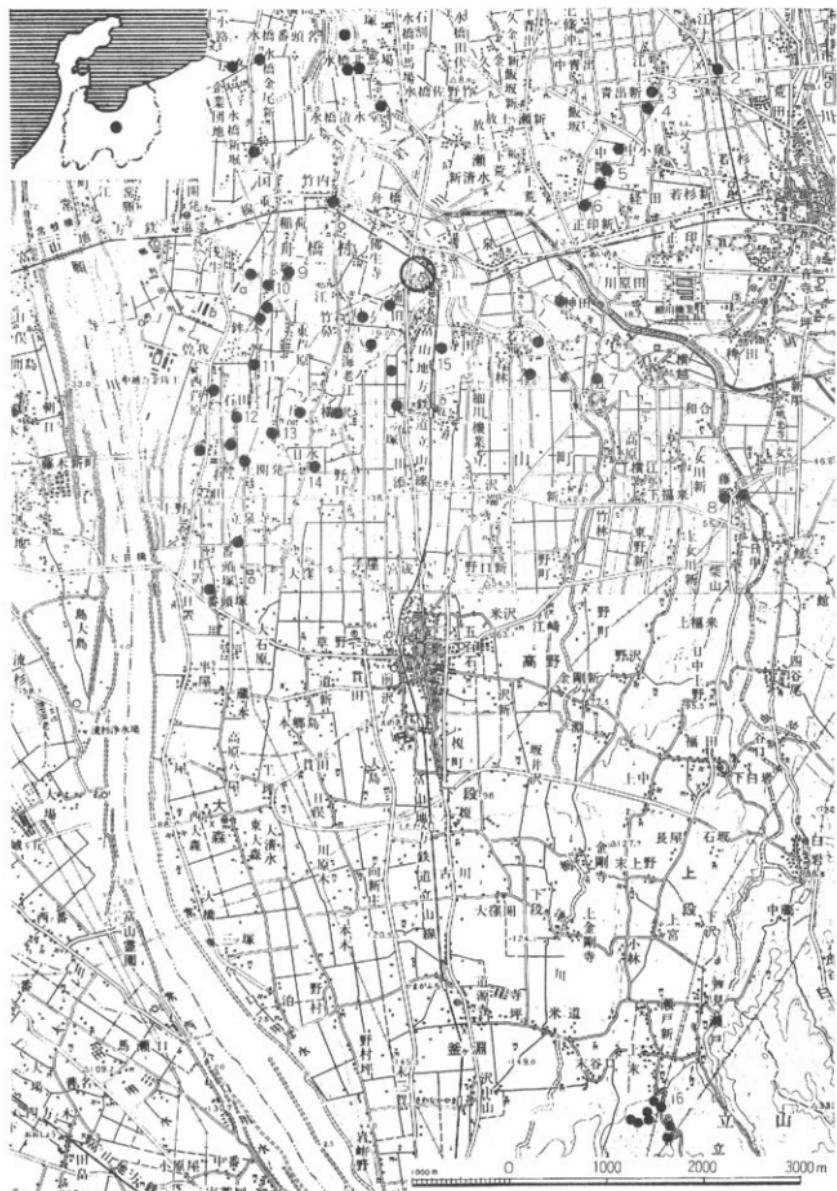
昭和61年1月、宅地造成の申請を受けて立山町教育委員会が試掘調査を行い、弥生時代の遺構・遺物を多数検出した。このため、同年7月から9月にかけて本調査が行われ、同遺跡が弥生時代中・後期および平安時代の複合遺跡であることが判明した。なお、この調査区は本年度調査区の北側隣接地にあたり、調査結果は『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』において報告している。

昭和62年度調査

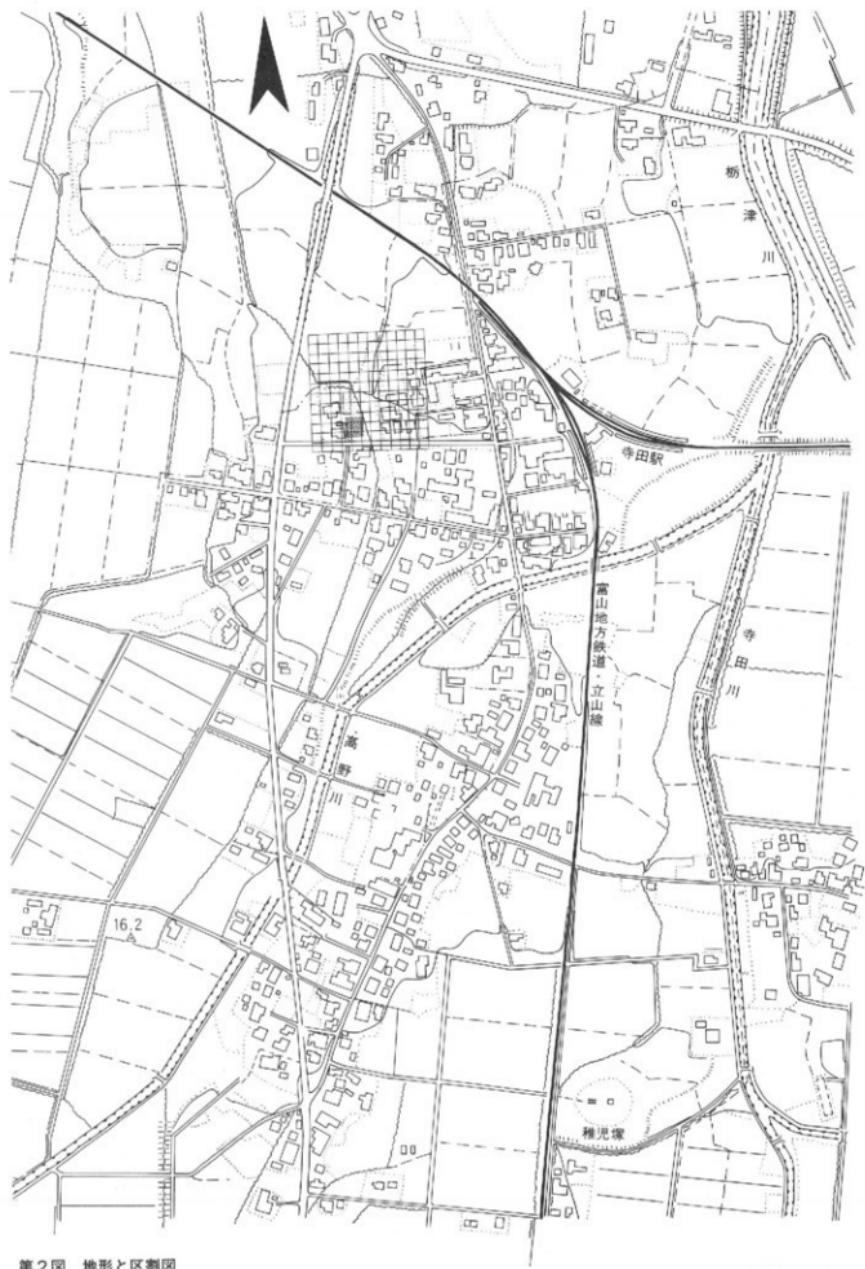
昭和61年12月、家屋新築に伴う宅地造成の申請が提出された。これを受け、立山町教育委員会は昭和62年1月21日の1日間試掘調査を実施し、溝・穴などの遺構と数多くの遺物を検出した。

この結果をふまえ、富山県教育委員会・立山町教育委員会・工事主体者の三者により協議・調整が行われ、立山町教育委員会が調査主体となり、国庫補助をうけて記録保存調査を実施することになった。

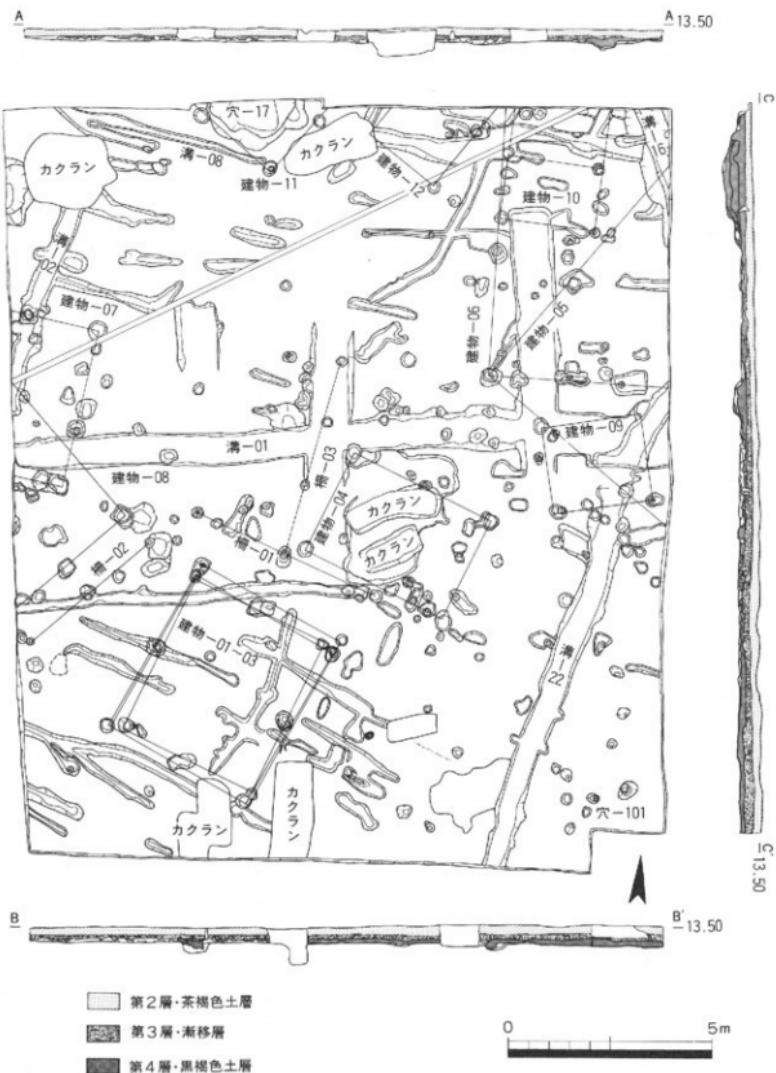
発掘調査は8月3日~9月11日の延24日間にわたって実施した。発掘面積は約300m²である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡
 1. 浦田遺跡 2. 東江上遺跡 3. 江上B遺跡 4. 江上A遺跡 5. 中小泉遺跡 6. 正印新遺跡
 7. 辻遺跡 8. 日中源兵衛腰遺跡 9. 塚越I遺跡 10. 塚越古墳 11. 鉢ノ木I遺跡
 12. 利田横枕遺跡 13. 五郎丸遺跡 14. 日水遺跡 15. 稲見塚 16. 上木窯跡群



第2図 地形と区割図



第3図 造構全体図

III 調査の概要

1 立地と層序(第2・3図)

浦田遺跡は、富山地方鉄道寺田駅の西約200m、立山町浦田字八郎に所在する。このあたりは常願寺川扇状地扇端部の湧水帯にあたり、柄津川に寺田川・高野川という小河川が合流する地点の西岸に近い。周囲は、かつては水田が広がる純農村地帯であったが、現在は宅地化が進んでいる。

遺跡は、前記小河川及びその小支谷によって開拓された微高地に立地する。この微高地は、南北約1km、東西約500mの広がりをもち、舌状を呈している。遺跡の範囲は、周囲の宅地化がかなり進んでいるため明確ではないが、この微高地の北半を占めているものと推測できる。標高は、12.5~13mを測る。

層序は、第1層・耕作土、第2層・茶褐色土層、第3層・漸移層、第4層・黒褐色土層、第5層・黄褐色砂質土層の順で堆積している。茶褐色土層は平均20cm、漸移層は5~15cmで南側ほど厚く、黒褐色土層は10~20cmの厚さで堆積している。

遺物包含層は第2~4層であり、遺構内の堆積土も基本的には黒褐色土である。

2 遺構

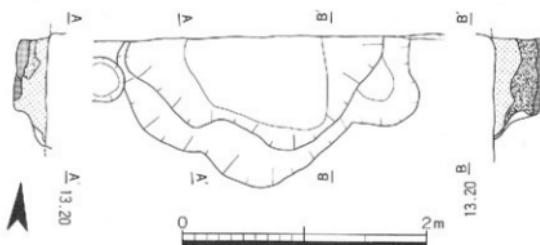
(1) 弥生時代後期の遺構

穴-17(第3・4図)

洞在区の北端、D2区で穴の南半部が検出された。平面形態は不整円形をなし、直径は約2.4m前後と推測される。南から南西側にかけて段をもち、最深部の深さは42cmを測る。

覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土ブロック混り黒褐色土、第3層・黄褐色土混り黒褐色土、第4層・黒褐色土混り黄褐色土の順で堆積している。第2層は穴の東側ほど厚く、第3層は穴の西側にのみ堆積している。第2~4層が遺物包含層になっている。

遺物は、裴(第9図3・9)・高杯(第9図13)が、穴の西側からまとまって出土している。



第4図 遺構実測図 穴-17

溝-16 (第3・12図)

調査区の北東隅で検出された。北西から南東に向ってまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は約1m、断面形態は舟底をなし、深さは36~46cmを測る。

覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土混り黒褐色土の順で堆積している。

なお、溝の方向及び堆積上より、昭和61年度調査区の溝-08の続きと考えられる。

溝-18 (第3図)

調査区の北西隅で検出された。南東から北西に向って走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は20cm前後を測る。断面形態は「U」字状をなし、覆土は黒褐色土の単層である。

遺物は、外間にススの付着した、ハケメ調整の脚部破片が出土している。

溝-22 (第3図)

調査区の南東で検出された。北東から南西に向ってまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は65~70cmを測る。底面は平坦で広く、深さは10~15cmを測り、北へ行くに従ってやや深くなる。

覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・黄褐色土混り黒褐色土の順で堆積している。

また、北側で溝-01と切り合っているが、覆土の状況より、溝-22が古くなる。

遺物は、底面及び第2層から深鉢(第8図1)・壺(第9図8)・高杯(第9図20)が、第1層から須恵器杯(第10図12・26・29)が出土している。

(2) 平安時代の遺構

建物-01 (第3・5図)

調査区南半で検出された、2間(4.0m)×2間(3.5m)の南北棟掘立柱建物である。建物-02・03と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、3棟の中で最も古いと考えられる。建物方位は、南北柱列でとるとN-22°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が2.0mの等間、梁行は東から1.8m・1.7mを測る。柱穴掘方は、不揃いである。深さは15~30cmを測る。なお、P₂は長径70cmの楕円形、P₃は長径50cmの楕円形と、他の柱穴に比べて大きく、掘方もしっかりしているが、これはP₂・P₃が建物-01~03を通して使用されているためであり、特にP₃は深さも45cmと、他の柱穴に比べて深く、途中に段をもっている。

建物-02 (第3・5図)

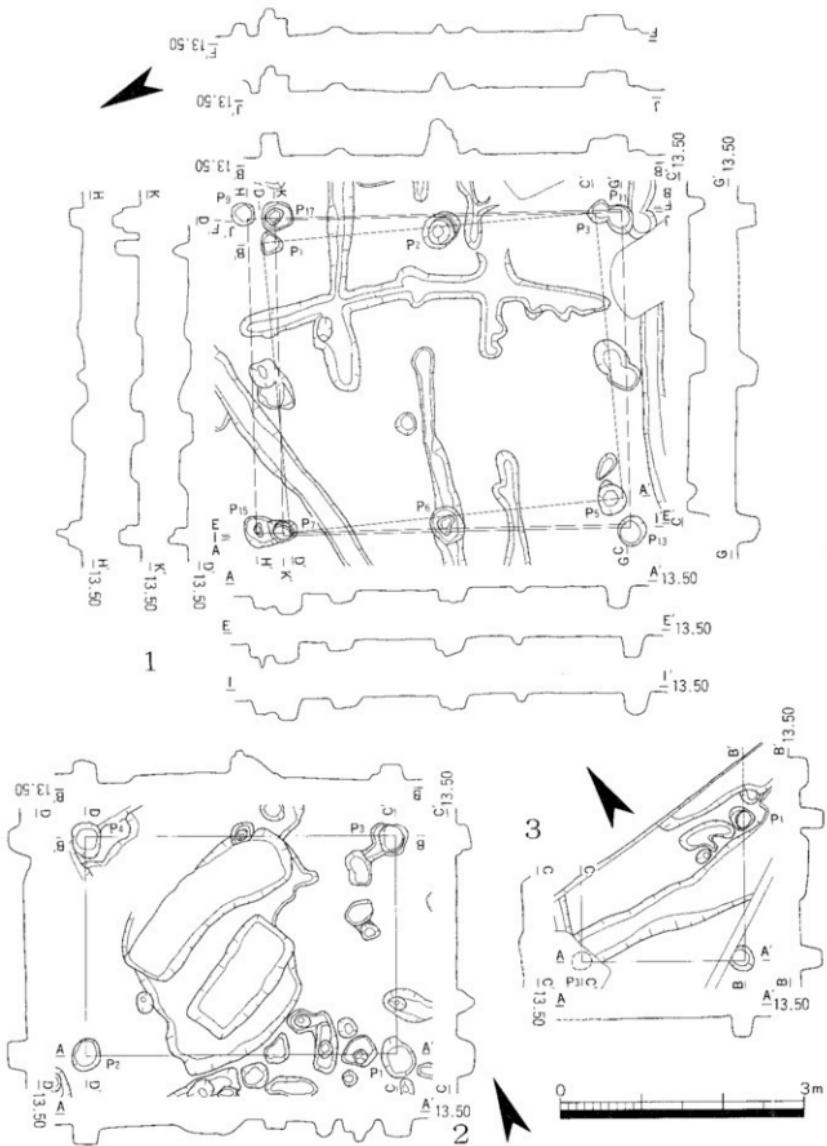
調査区南半で検出された、2間(4.6m)×2間(3.9m)の南北棟掘立柱建物である。建物-01・03と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、建物-01より新しく、建物-03に先行すると考えられる。また、P₂・P₃を建物-01と共用しており、特にP₃は東側柱列からはずれて位置している。建物方位は、南北柱列でとるとN-26°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が2.3mの等間、梁行は東から2.0m・1.9mを測る。柱穴掘方は、長さ(径)30~40cmの楕円形・円形・楕円形と不揃いである。深さも15~40cmと不揃いである。

遺物は、P₂とP₃から内面ロクロナデ調整のある土師器壺の破片が出土している。

建物-03 (第3・5図)

調査区南半で検出された、2間(4.3m)×2間(3.9m)の南北棟掘立柱建物である。建物-01・02と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、3棟の中で最も新しいと考えられる。また、P₁・P₂は建物-01・02と、P₃・P₄は建物-01と、P₅・P₆・P₇は建物-02と共用しており、独自の柱穴はP₇だけである。建物方位は、建物-02と同じくN-26°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が北から2.0m・2.3m、梁行は東から2.0m・1.9mである。柱穴掘方は、建物-02同様不揃いであるが、P₇は長径40cm、段をもつしっかりした掘方である。深さは15~30cmを測る。

建物-04 (第3・5図)



第5図 遺構実測図 1.建物-01-03 2.建物-04 3.建物-12

調査区中央やや南で検出された、2間（3.8m）×1間（2.5m）の東西棟掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でるととN-26°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が1.9mの等間、梁行は2.5mを測る。柱穴掘方は、径40~50cmの不整円形である。深さは15~30cmを測る。なお、南側桁行中央の柱穴は擾乱によって失われている。

遺物は、Bから土師器破片が出土しているが、小片のため時期は不明である。

建物-05（第3・6図）

調査区東側で検出された、2間以上（4.4m以上）×2間以上（6.2m以上）の南北棟掘立柱建物である。建物-06・09と重複しており、Bを建物-06と共用している。建物方位は、南北柱列でるととN-37°-Eをさす。柱間寸法は、桁行（B・B間）が3.1m、梁行（B・B間、B・E間）は2.2mの等間である。柱穴掘方は、長さ（径）40~50cmの隅円方形・円形であるが、Bのみは長さ30cmの隅円方形とひとまわり小さい。深さは25~30cmと揃っている。

建物-06（第3・7図）

調査区北東で検出された、2間以上（6.6m以上）×3間以上（7.8m以上）の南北棟掘立柱建物である。建物-05・10と重複しており、Bを建物-05と、Eを建物-10と共用している。建物方位は、南北柱列でるととN-1°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が南から3.0m・2.4m、梁行は3.3mを測る。柱穴掘方は、長さ（径）30~50cmの隅円方形・円形で、しっかりした掘方である。深さは20~40cmを測る。

建物-07（第3・6図）

調査区西側中央で検出された、2間（4.0m）×2間以上（3.6m以上）の東西棟掘立柱建物である。建物-08と重複している。建物方位は、南北柱列でるととN-10°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が1.8mの等間（推定）、梁行は北から2.6m・1.4mを測る。柱穴掘方は、長さ（径）40~50cmの隅円方形・円形で、しっかりした掘方である。深さは25~50cmを測る。

この建物は、南側1間が廂になると考えられ、身舎1間・廂1間の特異な構造をとる。県内には類例はなく、石川²⁾県鶴来町安養寺跡の柴木A地点に同様な構造の建物が見られる。安養寺跡の場合には、身舎と廂の柱穴掘方にはっきりとした違いが認められ、身舎・廂とも3.0mの等間である点に、当跡の場合との違いが認められる。

なお、遺物は、Bから平安時代の土師器甕（第9図32）が、Bから土師器甕（第9図36）が出土している。

建物-08（第3・6図）

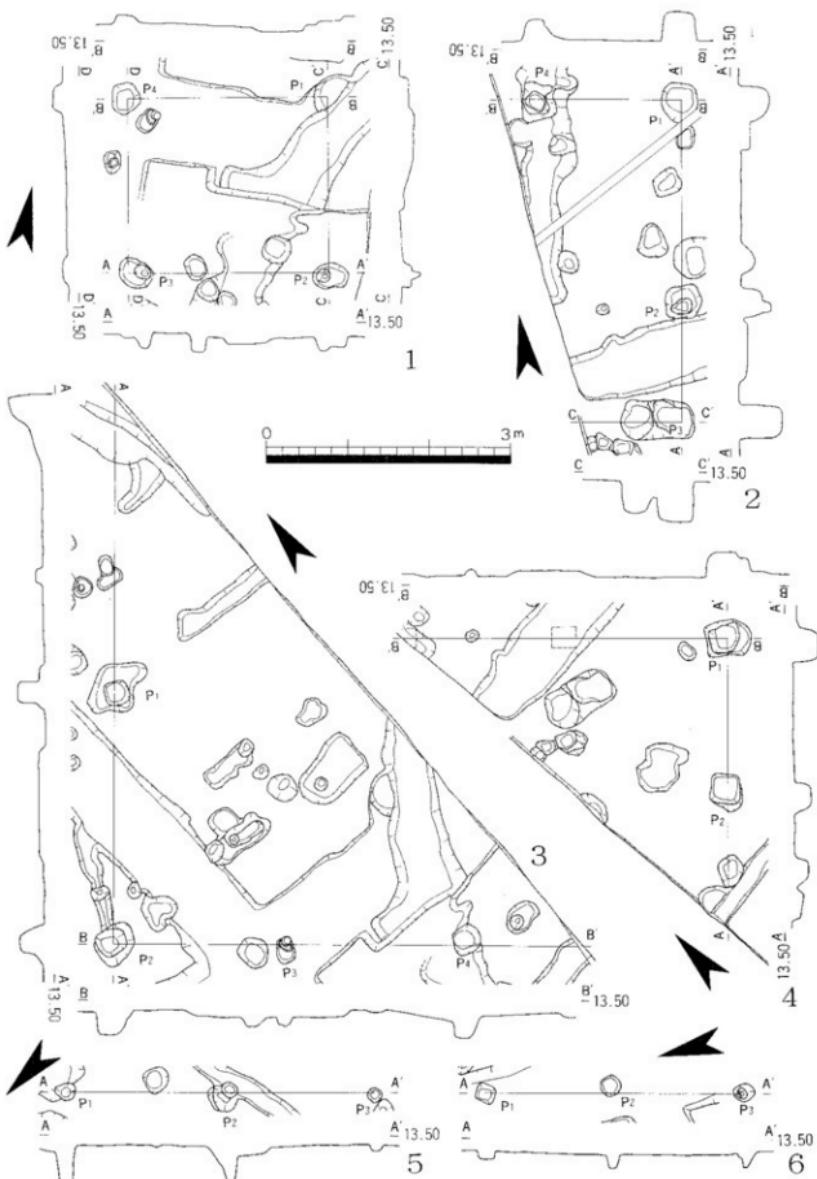
調査区西側で検出された、2間以上（4.0m以上）×2間以上（3.6m以上）の掘立柱建物である。建物-07と重複している。建物方位は、南北柱列でるととN-43°-Eをさす。柱間寸法は、南北柱列（B・B間）が1.8mを測り東西柱列は2.0~2.2mと推定される。柱穴掘方は、長さ35~40cmの隅円方形である。深さはBが30cm、Eが20cmを測る。

建物-09（第3・6図）

調査区東側中央で検出された、1間（2.2m）×1間（2.0m）の東西棟掘立柱建物である。建物-05と重複している。建物方位は、南北柱列でるととN-12°-Wをさす。柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.0mを測る。柱穴掘方は長径40~50cmの不整情円形で、深さは10~25cmを測る。

建物-10（第3・7・12図）

調査区北東で検出された、1間（2.3m）×1間以上（推定4間=6.9m）の南北棟掘立柱建物であり、北側妻列とみられる柱穴が、昭和61年度調査区の南端で検出されている。建物-06と重複している。建物方位は、南北柱列でるととN-3°-Eをさす。柱間寸法は、桁行（B・B間、B・E間）が1.6m、梁行は2.3mを測る。柱穴掘方は、径30cm前後の円形で、深さは、南側のBが15~20cm、北側のBが40cm、昭和61年度調査区の柱穴が約30cm前後を測る。



第6図 遺構実測図 1.建物-09 2.建物-07 3.建物-05 4.建物-08 5.槽-02 6.槽-03

建物-11 (第3・7図)

調査区北側で検出された、1間以上(2.2m以上)×1間以上(1.7m以上)の掘立柱建物である。昭和61年度調査区との関係から、1間×1間又は2間×1間になると推定できる。建物方位は、梁行(R₁・R₂)でるとN-39°-Eをさす。柱間寸法は、桁行(R₁・R₂間)が2.2m、梁行(R₁・R₂間)は1.7mを測る。柱穴掘方は、径40cm前後の円形・楕円形で、深さは15~30cmを測る。

建物-12 (第3・5図)

調査区北側で検出された、1間以上(推定2.0~2.1m以上)×1間以上(1.8m以上)の掘立柱建物である。昭和61年度調査区との関係から、1間×1間又は2間×1間になると推定できる。建物方位は、梁行(R₁・R₂)でるとN-33°-Eをさす。柱穴掘方は、径30cm前後の円形で、深さは25cm前後を測る。

構-01 (第3・7図)

建物-01~03と建物-04の間、建物-04に隣接して検出された柱穴列である。柱列方位はN-64°-Wをさし、建物-02・03の梁行及び建物-04の桁行と方位を同じくする。柱穴掘方は、R₁・R₂が径30cm前後の円形、R₃は長径50cmの横円形である。深さは、R₁・R₂が25cm前後、R₃が30cmを測る。柱間寸法は、2.4mの等間である。

なお、構-01と建物-04は、方位を同じくするものの、その距離が約30cmと接近しすぎており、両者が同時に存在したとは考えにくい。

構-02 (第3・6図)

建物-08の東南隅に、建物とはほぼ平行な形で検出された柱穴列である。柱列方位はN-46°-Eをさし、建物-08との距離は約90cmを測る。柱穴掘方は、径20cm前後と小さい円形である。深さは、R₁・R₂が45~50cmであるのに対してR₃は6cmと極端に浅い。柱間寸法は、R₁・R₂間が2.0m、R₂・R₃間が1.8mを測る。

なお、構-02と建物-08は、方位に若干の違い(約3°)があり、柱間寸法も10cm前後違っているが、あるいは構-02は建物-08の廊柱穴列であるかもしれない。

構-03 (第3・6図)

建物-04の北東側で検出された柱穴列である。柱列方位はN-15°-Eをさし、建物-04の南北柱列とは1Tのずれがある。建物-04からの距離は、最も近いR₁で約60cmを測る。柱穴掘方は、R₁が一辺20cmの方形、R₂・R₃が径20cm前後の円形である。深さは10~15cmを測る。柱間寸法は、1.6mと等間である。

なお、構-03の延長線上に構-01のR₁(R₁と仮称する)が存在し、構-03がR₁までという可能性も考えられる。この場合、R₁・R₂間が1.8m、R₁・R₃各間が1.6mと柱間寸法が若干違っているのが気になる。しかし、構-03と建物-04の方位差(11°)よりも、建物-01との方位差(7°)が小さいこと、構-03、構-01各々の柱穴の中でR₁(構-01はR₁と仮称する)の掘方だけが大きく、2次以上の使用が考えられること、等から、構-03がR₁まで延びていた可能性も否定できない。参考までに、建物-01とR₁間の距離は、約1.2mを測る。

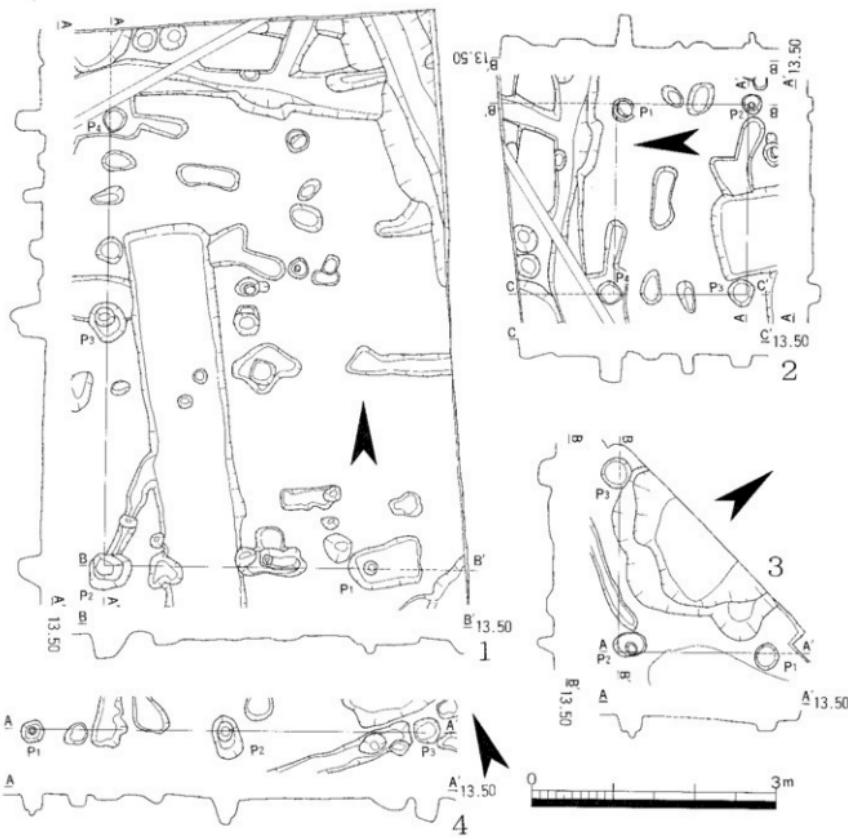
溝-01 (第3図)

調査区の北半で検出された。調査区中央やや北を東西にまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は80~100cmを測り、大部分は90cm前後である。底面は平坦で広く、深さは5cm前後ときわめて浅い。

覆土は黒褐色上の单層よりなる。

また、東側で溝-22と切り合っているが、覆土の状況から、溝-01が新しくなる。

遺物は、平安時代の土師器瓶(第9図28・30)・須恵器杯(第10図33)・壺の脚台部(第10図35)等が出土している。なお、溝-22の第1層出土とした須恵器杯(第10図12・26・29)は、この溝-01と切り合っている箇所から出土したものであり、溝-01に伴うものとも考えられる。



第7図 透構実測図 1.建物-06 2.建物-10 3.建物-11 4.槽-01

3 遺物

(1) 挽文時代の遺物 (第8図)

A 後期の遺物 (第8図3・4・8~10)

8は深鉢の胴上部であり、幅広の浅い沈線を1条横走させ、上部にはR Lの縄文を施している。胎土は砂粒が少ない。

9・10は精製深鉢の胴上部であり、同一個体と考えられる。幅広の浅い沈線を1条横走させ、上下に横位の綾杉文を施している。綾杉文は、上下を沈線にはさまれた区画文帯に充填されていたものであろう。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。本江・広野新遺跡に同様なものが見られる。
3) 4)

4) は粗製深鉢で、口縁部に嵌い無文帯を残し、その下はL Rの縄文を施している。胎土は大粒の砂粒を多量に含む。

3) は深鉢底部で、表面は風化が著しいが、縦位の縄文の痕跡が見られる。

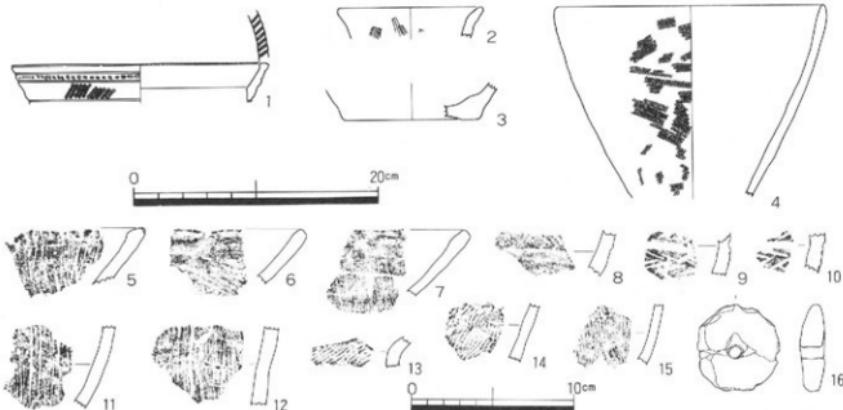
B 晩期の遺物 (第8図1・2・5~7・11~15)

5~7・11・12は、中屋式前後の粗製深鉢であり、5~7は口縁部、11・12は胴部破片である。5は口縁内側をやや肥厚させて、指撫によって若干凹んだ面を、斜め内側上方に向けて取っている。口縁外端は条痕原体によって連続刻みが施されており、条痕は植物の茎によるものと考えられ狭く深い。6は口縁端内外に浅い沈線を1条施しており、端には指撫でにより面をとっている。口縁外端はよく磨いており、その下に浅い条痕を斜めに施している。7は口縁端内側に浅い沈線を1条施しており、端には指撫でにより面をとっている。口縁外端はやはりよく磨いており、その下に浅い条痕を縱に施している。11・12はやや幅広の条痕を縱に施している。胎土は、5・11が大きめの砂粒を多く含み、6・7・12は細かめの砂粒を少量含む。

1・13~15は、晩期末又は弥生時代の天王山式に属すると考えられる。1は内唇して開く精製深鉢の口縁部で、口縁端に連続刻みを施し、2条の沈線間を棒状具により連続刺突し、その下に幅広の縄文帯をとて下に沈線を1条引く。胎土には大きめの砂粒を多く含む。13~15は同一個体の頸部から胴部であり、細かなR Lの縄文を施している。胎土は砂粒が少なく、纖維を含む。

C 土製品 (第8図16)

有孔の、中央部が厚い円盤状土製品で、紡錘車である。焼成前に穿孔を行っている。



第8図 遺物実測図 1.溝-22 5.穴-101 その他、包含層

(2) 弥生時代後期の遺物

弥生時代後期の遺物は、穴一17及び溝一22に伴って出土したものと、包含層から出土したものがある。包含層からの出土遺物は、調査区北側からの出土量が多く、南へ行くに従って少なくなる。

穴一17出土遺物（第9図3・9・13）

3は無文の有段口縁甕で、口径23.0cmを測る。有段部分外面の屈曲線が明瞭でなく、内面にも段が無い。口縁全体が頸部から斜めに開き、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整。9は「く」の字口縁甕で、口径18.0cmを測る。頸部内面は丸味を持って折れ、外反する。端部は面をなす。口縁部内外面ともハケメ調整。13は体部が小さく浅めで口縁部が大きく外反して開く高杯で、口径22.8cmを測る。内外面ともヘラミガキ調整の後、赤彩する。

溝一22出土遺物（第9図8・20）

8は「く」の字口縁甕で、張りが弱く最大径が下にある胴部に、短く外傾する口縁部がつく。胴部は全体的に厚作りで、口縁部はやや薄手。口縁端は角ばるが、面はとらない。口径19.8cm。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はハケメ調整。なお、8は溝中央から押しつぶされた状態で出土したが、底部は出土していない。20は高杯の脚部で直線的に開き、裾はわずかに弧を描いて開くものと考えられる。内部は中空で、外面に赤彩を施している。

包含層出土遺物（第9図1・2・4～7・10～12・14～19・21）

1は細頸長頸甕で、口径9.5cm。端部内面を若干肥厚させている。端部外面はヨコナデ、他はハケメ調整。

2は擬四線を施した有段口縁甕で、口径18.0cm。有段部分外面の屈曲線が明瞭でなく、外反して端部を尖り気味におさめる。口縁部内面はヨコナデ調整。

4～6は無文の有段口縁甕である。4は口径16.2cm、外面に明確な棱をもち、直立気味に外反して端部は丸くおさめる。5は口径16.2cm、外面の屈曲線は明瞭でないが、頸部内面に鋭い棱をもつ。直線的に外傾して端部は丸くおさめる。6は口径16.2cm、有段部外面を強く張り出させ、直立気味に外反して端部は丸くおさめる。なお、4～6とも口縁部内面はヨコナデ調整。

7は受口状口縁甕で、口径20.1cm。口縁外面をクシ状具で連続刺突している。口縁部内面はヨコナデ調整。なお、外面に多量のススが付着する。

10～12は「く」の字口縁甕である。10は口径16.3cm、頸部内面が丸味をもって折れ、途中で外傾度が変わる。頸部はヨコナデしてわずかに凹ませ、面をとる。口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ調整。11は口径20.0cm、頸部で急激に外反し、短い口縁部が水平に近く開く。端部は上下につまんでやや幅広の面をなし、つまり上げた部分をもう一度ナデして上に向いた面を作っている。胴部と頸部以上の接合部が、外面にはかすかに、内面にははっきりと残っている。口縁部外面はヨコナデ、胴上部内外面はナデ調整。12は口径18.2cm、直線的な胴上部からゆるやかに外反し、斜め上方に直線的に口縁部が広く、端部は丸くおさめる。口縁部外面及び頸部内外面はヨコナデ、胴上部内外面はナデ調整。なお、口縁部内面及び胴上部内外面に、ハケ原体によるものと考えられる擬四線風の文様を施している。あるいは、ハケメ調整を意識的に残したものとも考えられる。

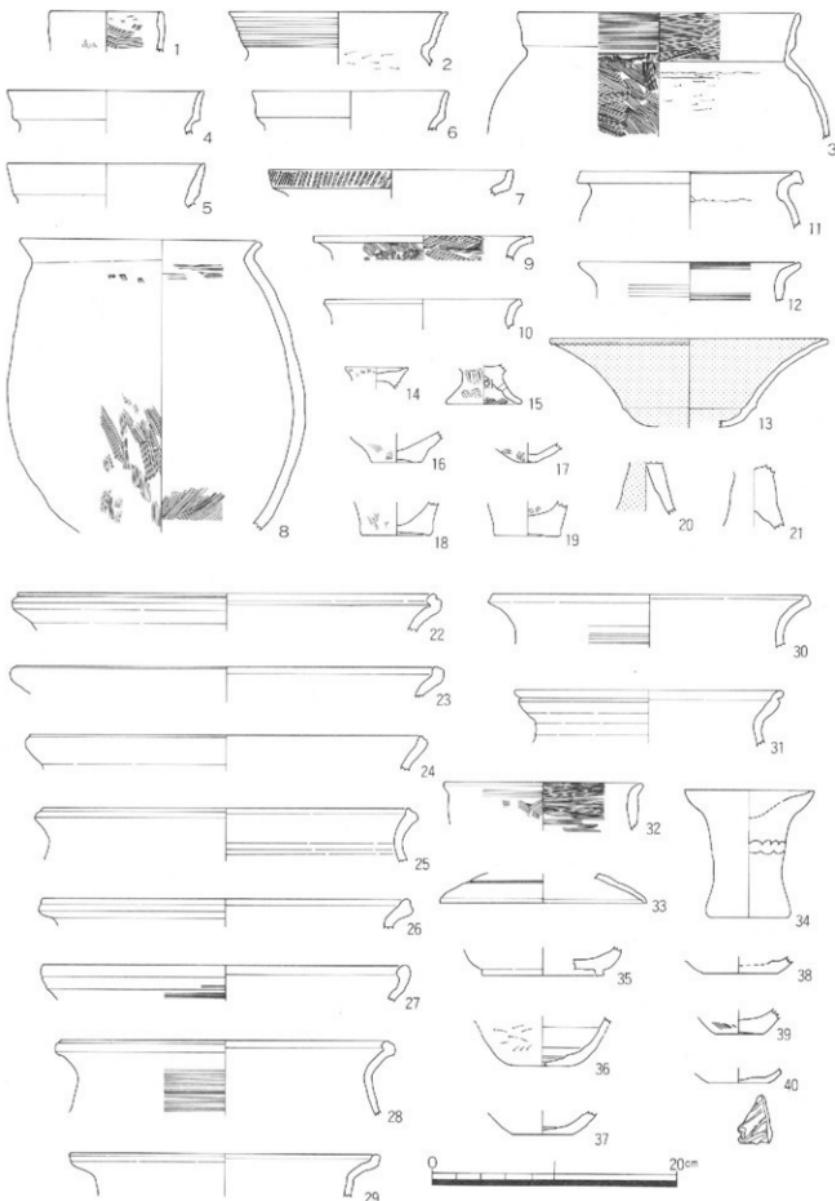
14は蓋のつみみで、径5.2cmとかなり大きい。頂部を広く凹ませ、端部を斜め上方につまみ出している。外反して伸びる体部がつくものと思われ、蓋の蓋と考えられる。

15は台付蓋又は台付錐の脚部で、脚端部径6.2cm。偏った位置に2小孔を穿っているが、内面に貫通していない1小孔があり、3孔を穿つつもりであったらしい。脚外面及び体部内面はヘラミガキ、脚内面はケズリとハケメ調整。

16～19は底部で、いずれもやや上げ底状を呈する。

21は高杯の脚部で、脚内は充填されている。外面はナデ調整。

（森）



第9図 遺物実測図 32.建物-07・P1 3-9・13.穴-17 36.建物-07・P3 28・30.溝-01 8・20.溝-22 その他.包含層

(3) 平安時代の遺物

平安時代の遺跡には須恵器と土器がある。調査区全体の遺物包含層である第2~4層から出土している。遺構内からの出土点数は少なく、一括として取り扱う。

須恵器（第10図）

須恵器は杯B蓋・杯A・杯B・壺・瓶・横瓶・甕などの破片がある。小破片が多く、全形を知り得る個体は少ない。

⁵⁾

杯B蓋 第1次調査報告書においては4群に大別されている。本年度調査においては、Ⅲ群一つまみが付かず、頂部切り離しが糸切り技法のもの、Ⅳ群一つまみが付かず、頂部切り離しがヘラ切りによるもの、に属する個体は見られなかった。遺物は、I・II群に属する個体と、若干のそれ以前の時期の個体に分けられる。

I群（2~4・6・10・11）つまみが付き、頂部切り離しに糸切り技法を用い、頂部全面又は肩にロクロ削りを施すものを含む。頂部は平坦で肩が張って斜め下方にのび、縁部近くで小さく屈曲する。縁端部は丸味をもって折れるものの、稜を明瞭に残すもの（2・3）があり、端部は垂下するもの、やや外方にのびるものがある。6は頂部中央までロクロ削りを行い、肩には1条の沈線が巡る。頂部内面はロクロナデ調整。口径は11.8~16.0cmのものがある。口径によって、11.8~12.0cm（10・11）、13.4cm（6）、16.0cm（2・3・4）の3種に分類されよう。

II群（5・7~9）つまみが付き、頂部はヘラ切り技法によって切り離し、ロクロ削りを用いないものを含む。全形を知り得るものは8のみで、他はつまみが付くものと想定してこの群に入れた。8は口径11.8cm、高さ2.3cm。平坦な頂部には、中央部がやや高くなる小さなつまみが付く。つまみの最大径は2.2cm。頂部内面は中央までロクロナデ調整。9は口径11.6cm、頂部は丸味をもってゆるやかに縁端部に到る。端部は巻き込む形態。頂部内外面には不定方向の仕上げナデが施されている。口径は11.6~14.0cmのものがある。

⁵⁾

I群土器は上末窯跡群の法光寺谷1号窯の遺物と推定されているが、本年度I群土器は上末窯跡群の製品と推定されつつも、窯跡名までは特定できないと考えられる。I・II群土器は併行関係にあり、9世紀中頃を中心とする年代と推定されている。

1は、口径約18cm、頂部はほぼ平坦でゆるやかに縁端部にのびる。端部は折れまがる形態。頂部外面は浅いロクロ削り調整で、中心には最大径4.0cmの中央が窪むボタン形のつまみがつく。頂部内面は一定方向のナデ仕上げ。この差⁶⁾は、上末窯跡群とは別の窯の製品で、I・II群に先行して、8世紀前半の頃の遺物と推定されている。

杯A（12~20）口縁部が直線的に外傾するもの、端部で外傾度が増すものがある。底部外面はヘラ切り後、軽いナデ付調整。内面は中心部までロクロナデをするもの、仕上げナデを施すもの（18）がある。口径は11.0~13.0cm。

杯B（21~34）口縁部は直線的に外傾し、端部近くで外傾度が増す。高台は細くて低く、外端部は平坦なもの、わずかに上がるものなどがある。底部内面は仕上げナデを施すもの（28~30）がある。21は口径15.1cm、高さ6.4cm。底部はヘラ切り後ナデ調整。高台周辺はロクロナデ調整。29は高台が強くふんばる形。底部外面ヘラ切り後ナデ付け、内面は一方向のナデ調整。8世紀前半頃のものと考えられる。

壺（35~36・39）35は高台が付く壺の底部。高台は強くふんばった形で、端部は垂下する。底部は丸底風で、内面ナデ調整。36は壺の体部。外面に自然釉がかかる。39はゆるやかに外反する口頭部。口径12.0cm。

瓶（37）長颈瓶の頭部。外面に2条の沈線が巡る。

横瓶（38）口径11.9cmの横瓶の口頭部。体部と考えられる破片の調整は、内外面叩き締めの後、ロクロナデ。

甕（40）口縁端部は水平にのび、内面に段をもつ。端部直下には突帯が巡り、その下に櫛描波状文帯が巡る。稜角的に仕上げられ、古い様相をもつが、櫛描波状文の形態から、8世紀前半以降のものと考えられる。

土器（第9図22~40、第11図2・4）

土器は杯A・杯B蓋・杯B・壺・瓶・甕・壠がある。小破片がほとんどで、全形を知り得る個体はない。

杯A (40) 底部片。外面は糸切り未調整。内面には漆が付着している。

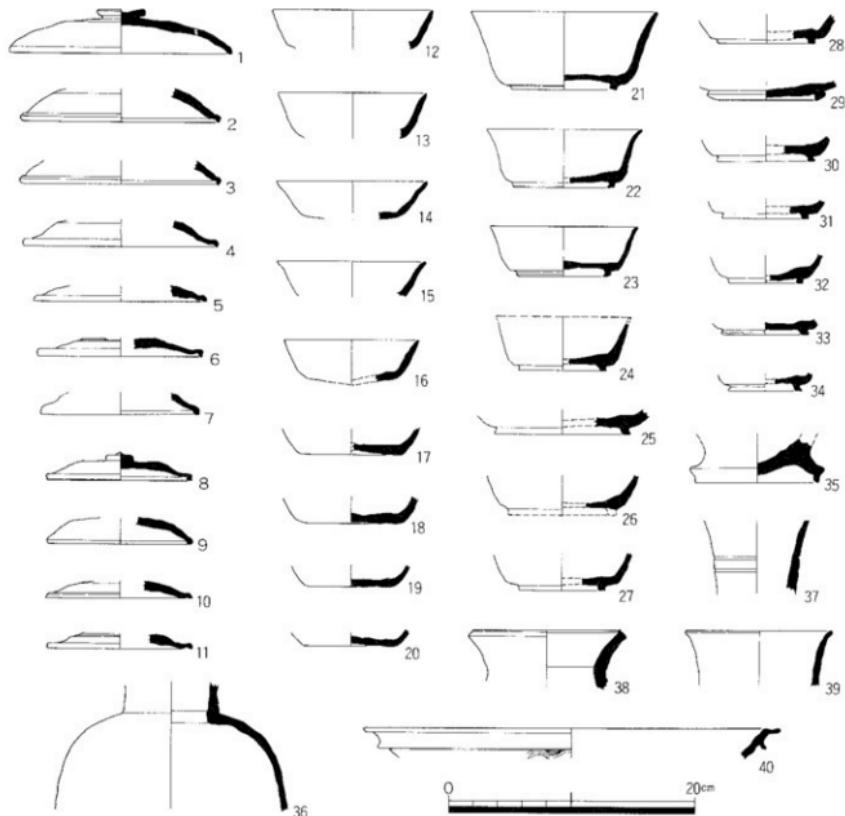
杯B 盖 (33) 内外面ロクロナデ調整。外面には二条の沈線が巡る。内外面赤彩。

杯B (35) ややふんばった高台が付く杯。内外面赤彩され、33とセット関係の可能性がある。

椀 (2) 口径10.0cm。口縁端部は端部付近で外傾度が変わり、端部内面はやや肥厚気味。皿と共に平安時代末。

皿 (4) 口径9.0cm。内外面ロクロナデ調整。口縁端部はゆるやかに外反し、端部は外面に面を取る。内外面赤彩。

甌 (22~26・28~32・36~38) 大部分が口縁部小破片。口径16.0~34.7cmのものがあり、21.6cm、25.0~26.5cm、30.0~34.7cmに分けられる。口縁部形態は多様で、第1次調査報告書に従って分類する。A (30) 縁端部をつまみ上げて断面三角形の小さな口縁帯を作るもの。C₁ (22・28・31) 縁端部近くで内肩し、端部を肥厚させたもの。C₂ (24・25) 内端部を小さくつまみ出したもの。D₁ (26・29) 縁端部内面を肥厚気味に仕上げたもの。D₂ (23) 縁端部を内側に折り返して肥厚させたもの。28の体部上半外面はカキメ調整。32は口縁端部外面がやや肥厚する甌。体部外面はハケメ調整で古い様相を示すがとりあえずこの項で述べた。36~38は小甌の底部。36は内面ロクロナデ、底部・体部外面にはケズリを施す。38の底部は糸切り未調整。27は縁。口径30.0cm。口縁部は巻き込んで肥厚する。



第10図 遺物実測図 33・35.溝-01 12・26・29.溝-22 その他、包含層

(4) 中・近世の遺物 (第11図1・3・5~30)

中・近世の遺物には、土師質小皿・中国製磁器・珠洲・瀬戸・伊万里・越中瀬戸がある。第2層からの出土が多い。

土師質小皿 (1・3) 口縁部小破片。1は乳白色を呈し、口径約11.0cm、3は淡肌色を呈し、口径約10.0cm。口縁端部はヨコナデによって薄く尖った形状となる。中世後半の頃のものと考えられる。

中国製磁器 (25) 青磁の碗の体部小破片。淡緑色を呈し、内面には堅彫りで文様を施す。

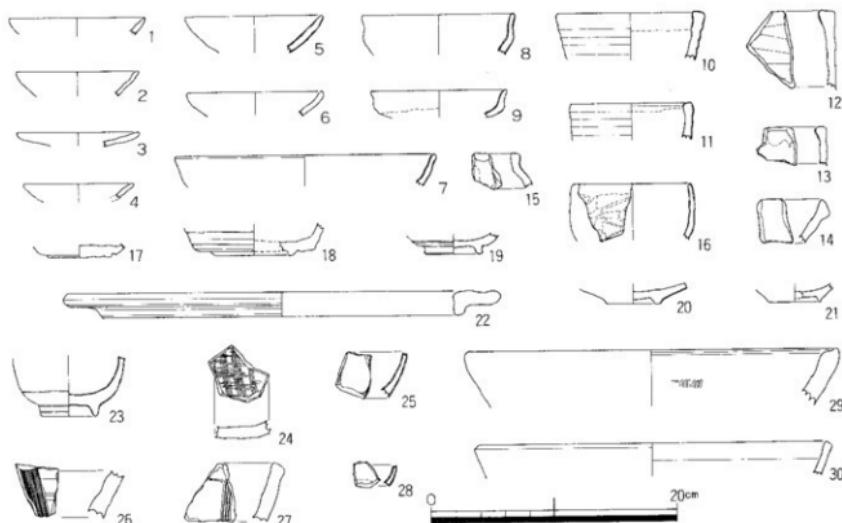
珠洲 (26・27・29・30) 珠洲焼の鉢。26は内面のロクロ痕が明瞭で、細かい11本以上のオロシメを施している。27は体部が直線的に外傾し、端部外面で面を取る。内面には10本以上のオロシメ。29は口縁端部がやや内脣気味で、内面に面を取る。オロシメは13本。30はやや薄手の体部が直線的に外傾し、口縁端部は外面に面を取る。26・27・29は13世紀後半~14世紀代。30はやや古く、13世紀前半頃と考えられる。

瀬戸 (24) オロシ皿の底部片。灰白色を呈し、内面には縱横に荒いオロシメ、外面削り調整。

伊万里 (23) 内外面淡青色を呈する碗の底部。外面には、高台に2本、体部に1本の青い横線が巡る。時期は、17世紀後半~18世紀代と考えられる。

越中瀬戸 (5~21・28) 越中瀬戸には皿・鉢・丸碗・小壺がある。5~9・20・21は皿。5~6は口縁部が内脣気味にのびる丸皿で口径は共に11.2cm。5は内外面黒褐色、6は茶褐色。8は口縁部中央に弱い稜を有し、端部が外傾する。口径は12.4cm。9は底径6cmの削り出し高台の皿と判明している。口縁部は水平から大きく上方へ向けてのび、端部で外傾する。口縁部には内外面茶褐色の鉄釉を施す。7は口径約21cmの大きめの皿で、内外面に鉄釉を施す。26は断面四角形、21は三角形の削り出し高台。20の内面には重ね焼の跡が輪状に残る。10~14は鉢。10~11・13は外面に明瞭なロクロ痕を残し、口縁端部は平坦で内面がやや肥厚する。外面と口縁端部内面に施釉される。14は挿鉢の口縁部片。16は丸碗。内面、口縁端部外面に施釉し、削り仕上げの体部にはアメ状の釉を流しかける。17~19は鉢・又は碗の底部。17・19は削り出し高台。18は体部外面に淡緑色の釉がかかる。

その他 (22) 残存率%。断面、水平にのびる端部下面にスヌ付着。七輪などの練炭を固定する道具か。



第11図 遺物実測図 13.建物-04・P2 その他、包含層

IV まとめ

浦田遺跡は、昨年に引き続いて2回の発掘調査を行った。そこで、昨年の調査成果を振り返りながら、本年度の調査成果と合わせて、これまでその実体について明らかになった点を簡単にまとめてみる。

1. 遺跡は、弥生時代中・後期、平安時代の集落跡と考えられる。

2. 1次調査区北側から、弥生時代中期の穴・溝が検出され、比較的多くの同時代の土器が出土した。

県内では弥生時代中期の遺跡は少なく、土器がある程度一括して出土している遺跡としては、高岡市石塚遺跡・滑川市魚飼遺跡・小杉流通業務団地内No21遺跡・上市町中小字遺跡などが挙げられるにすぎない。その不備を補う上でも良好かつ重要な資料であると言える。

7)

遺物の器種には、釜・甕・鉢・高杯・蓋などがあり、石塚II期のものと考えられる。

弥生時代中期の遺構は、調査区北側のみで、遺物も2次調査では検出されなかった。当該期の遺構は調査区北側がその南端を示し、範囲は北へ向かってのびているものと考えられる。

3. 1次調査区南側からは、主に弥生時代後期の溝が検出された。同時期の遺物はその周辺から出土している。

器種には、釜・甕・高杯・鉢・蓋がある。甕は、在地系の有段口縁甕と巣内系の「く」の字口縁甕、山陰系の甕がある。高杯・蓋には赤彩する個体が多い。時期は、立山町辻遺跡第1群土器と第2群土器の間にに入る遺物が大部分。

2次調査では、同期に所属すると考えられる遺構は穴1・溝3にすぎない。遺物も小破片が多く、少ない。

器種には、甕・甕・高杯・蓋がある。高杯は、内外面赤彩したものが出土している。

4. 1次調査で、遺物包含層から、古墳時代後期の土師器（甕）・須恵器（高杯・杯蓋）が出土している。出土量は非常に少なく、7世紀末頃のものであろう。

5. 平安時代の遺構は、1次調査では、3間×2間が1棟、2間×2間が2棟、1間×1間が1棟、5間×3間が1棟の計5棟が検出されている。2間×2間の2棟の建物は、平面積が一般的の2間×2間の建物より広いこと、完数尺を用いる点など若干の特殊性が見られた。

2次調査では、2間×2間3棟、2間×1間1棟、2間以上×2間以上2棟、2間以上×3間以上1棟、2間×2間以上1棟、1間×1間1棟、1間×1間以上1棟、1間以上×1間以上2棟の計12棟の建物、幅3・溝1が検出された。大部分の建物が、発掘区内の部分的検出であり、周囲への広がりが予測される。

6. 平安時代の遺物は、遺構内からの出土は少なく、遺構周辺の第2～4層遺物包含層からの出土が大部分である。遺物には、須恵器・土師器がある。

須恵器は、杯B蓋・杯B・杯A・皿A・瓶・横瓶・甕・壺・壺蓋などの破片がある。大別して、上末窯跡群の製品とその他の窯跡の製品に分けられ、時期は9世紀中～末頃と推定される。

2次調査では、数片の8世紀前半の須恵器杯B蓋・杯B・甕の出土が見られた。

土師器は、口縁部形態が多様な甕が主体をなし、他に杯A・杯B・杯B蓋・楕・皿・壺の破片がある。

1次調査では、内外面赤彩した杯A・少量の内面黒色の杯・杯Bが見られた。

土師器の時期は、明確ではないが、須恵器と同年代のものであろう。

7. 中・近世の遺物は、主に第2層遺物包含層から出土している。中世末の土師質小皿、13～14世紀の珠洲焼鉢、青磁、瀬戸のオロシ皿、17世紀後半～18世紀代の伊万里、越中瀬戸の皿・楕・鉢・小壺などがある。

8)

8. 遺跡の所在する浦田地区周辺は、「東大寺領大蔵莊」に比定されている。莊園の存続期間は、文献から8世紀中頃～10世紀末と考えられており⁹⁾、当遺跡の営まれた時期もその中に含まれる。大蔵莊と当遺跡、及び周辺の遺跡との関係の解明が、引き続いての今後の課題である。

(北川)

造構名	棟方向	柱間数	規 模		柱間寸法m(尺)		平面積 (m ²)	方 位	備 考
			桁×梁(尺)		桁	梁			
建物O 1	南北棟	2×2	4.0×3.5 (13.3)(11.7)	2.0 (6.7)	1.7, 1.8 (5.7) (6)		14.0	N-22°-E	
建物O 2	南北棟	2×2	4.6×3.9 (15.3)(13)	2.3 (7.7)	1.9, 2.0 (6.3)(6.7)		17.9	N-26°-E	
建物O 3	南北棟	2×2	4.3×3.9 (14.3)(13)	2.0, 2.3 (6.7)(7.7)	1.9, 2.0 (6.3)(6.7)		16.8	N-26°-E	
建物O 4	東西棟	2×1	3.8×2.5 (12.7)(8.3)	1.9 (6.3)	2.5	(8.3)	9.5	N-26°-E (南北柱列)	
建物O 5	南北棟?	2以上×2以上	6.2~×4.4~ (20.7)(14.7)	3.1 (10.3)	2.2	(7.3)	27.3 以上	N-37°-E	
建物O 6	南北棟	3以上×2以上	7.8~×6.6~ (26) (22)	3.1 (10.3)	2.2	(7.3)	51.5 以上	N-1°-E	
建物O 7	東西棟	2以上×2	3.6~×4.0 (12) (13.3)	1.8 (6)	2.6, 1.4 (8.7) (4.7)		14.4 以上	N-10°-E (南北柱列)	南廂付
建物O 8	東西棟?	2以上×2以上	3.6~×4.2~ (12) (14)	1.8 (6)	2.1	(7)	15.1 以上	N-43°-E (南北柱列)	南廂付
建物O 9	東西棟	1×1	2.2×2.0 (7.3)×(6.7)	2.2 (7.3)	2.0	(6.7)	4.4	N-12°-W (南北柱列)	
建物1 0	南北棟	4?×1	6.9×2.3 (23) (7.7)	1.6~1.8, 1.6 (5.3~6)(5.3)	2.3	(7.7)	15.9	N-3°-E	
建物1 1		1以上×1以上	2.2~×1.7~ (7.3) (5.7)	2.2 (7.3)	1.7	(5.7)	3.7 以上	N-39°-E (南北柱列)	
建物1 2		1以上×1以上	2.1~×1.8~ (7) (6)	2.1 (7)	1.8	(6)	3.8 以上	N-33°-E (南北柱列)	

第1表　浦田造跡昭和62年度検出掘立柱建物

V 考察

浦田遺跡から2次にわたる調査によって出土した遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代及び中・近世のものである。このうち、縄文時代、古墳時代、中・近世のものは少量で、弥生時代、平安時代のものが大半を占める。遺構は、弥生時代中期の穴、溝、同後期の穴、溝、平安時代の掘立柱建物が検出されている。

以上の中で、本章では今年度の調査に関連した、弥生時代後期と平安時代の遺構について考察を行う。

なお、昭和61年度調査区の遺構全体図、遺物実測図及び弥生土器観察表を参考のため載せておく。

1 弥生時代後期の遺構について（第3・12・13図）

第1次・2次調査を通して検出された遺構は、穴2、溝5条である。これらは、出土遺物より時期の判明したものであり、他に第2次調査区で多数検出された平行な小溝がある。

このうち、第1次調査区の溝-08（以下、溝-I-08と記述する。）と第2次調査区の溝-22（以下、溝-II-22と記述する。）については、排水用の溝と考えられる。そもそも、当遺跡は水位がかなり高く、15cmも掘ると水が湧いてくる状態である。このため、居住地として利用するなら、まず第一に水はけを良くすることが必要になる。同様な理由から、溝-I-09・10についても、居住域の区切りの意味を含めた排水溝と考えられる。

ここで問題になるのが、平行な小溝である。これらはいずれも、幅20~30cm、深さ10cmを削り、溝-II-22に対し直交する形態をとって掘られている。これは、溝-II-22と小溝群が何らかの意図をもって規則的に掘られたと考える根拠となろう。また、これら平行する小溝群北端近くに位置する溝-II-08からは、ハケメ調整を施した弥生土器片が出土しており、このことも小溝群の時期を知る手がかりとなろう。

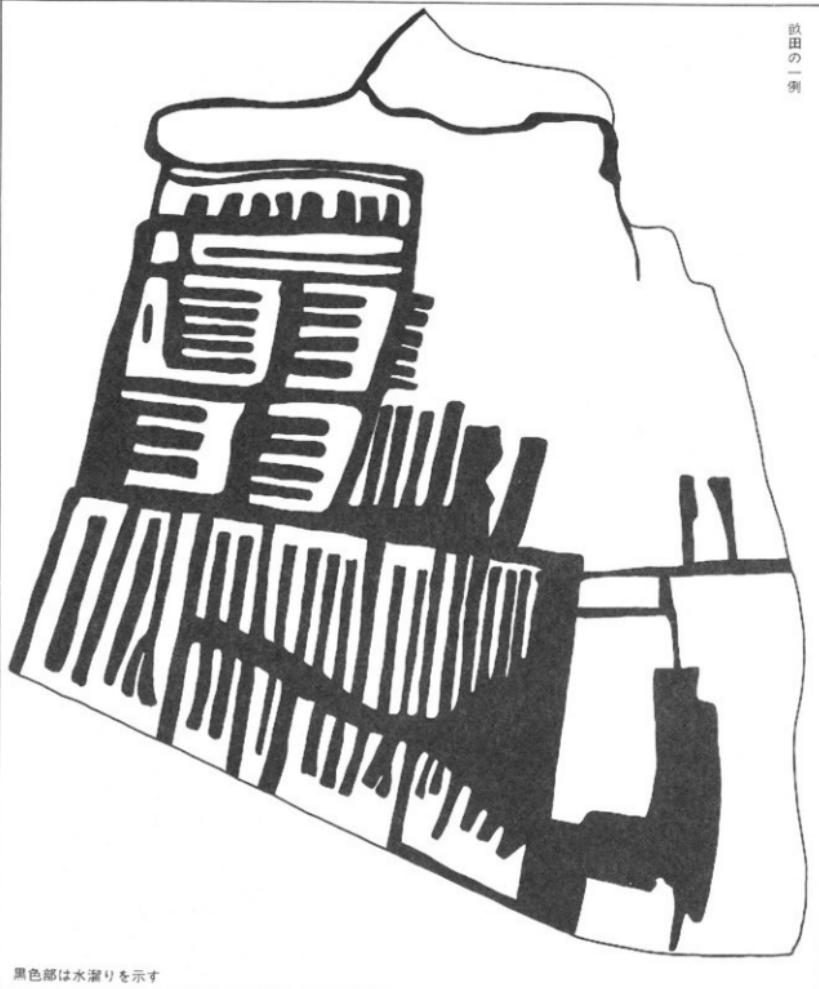
次に、この小溝群の性格であるが、石川県鹿島町徳前C遺跡において同様な小溝群が検出されており、湯尻修平氏によって興味ある考察が行われている。この中で氏は、これらの小溝群を水田排水用の溝としており、その根拠として『石川県羽咋郡卯ヶ瀬周辺総合調査報告書』「旧福野潟及びその周辺の地形」の畠田の記述を引用している。少々長くなるが引用すると「現在、福野潟地は甚しく低湿であるが、殆んど水田に開拓せられている。しかしこの沼田の底を浅くするため周囲の土を掘り上げたのでその跡は殆んど水田面積に等しい水溜りができる。これは…（中略）…一般に畠田と称せられる。…（中略）…筒の歯形に並んだ水溜りが光ってみえる…」とあり、第13図が載せてある。湯尻氏は、徳前C遺跡が地下水位の高い地形に立地している点から、湿地の一形態である畠田の例を出されているが、当浦田遺跡も地下水位がかなり高く（15cm程度掘ると湧水し、雨が1日降ると調査区は池になった。）、畠田の例があてはまるであろう。

県内においては、この様な小溝群の例を寡聞にして知らないが、石川県において溝の幅・間隔とともに浦田遺跡に近い例を求めるに、金沢市千木ヤシキタ遺跡があげられる。この遺跡は沖積平野の低湿地帯に立地し、浦田遺跡が扇状地扇端部に立地しているのとは、立地に若干の違いがあるが、ともに排水不良地にある点では一致している。小溝群の性格について報告書には「形状は最近、群馬県で検出された扇跡と類似していることから、遺構も扇の痕跡かと思われる」と記されている。群馬県の遺跡というのは熊野堂遺跡のことと思われるが、同報告書には「花粉分析からは、イネ科植物が検出され、同様のプランツ・オバール分析からはイネが検出されている」とあり、陸稲の扇であった事をうかがわせている。

以上の事例から考えるに、当遺跡で検出された平行する小溝群は、農耕おそらくは稻作（水稻耕作であったか陸稲耕作であったかは別にして）のための排水溝であろうと推定されるのである。



第12図 第1次・2次発掘調査区遺構全体図



黒色部は水漏りを示す

第13図 鉢田の一例 (「石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告」1955より転載)

2 古代の掘立柱建物について

浦田遺跡の調査面積は合計約850m²にすぎない。この狭い地区において、平安時代の掘立柱建物が17棟検出されており、その密度はかなり高いといえる。また建物の内容も、25m²を超える大型の2間×2間建物、身舎梁行1間の附舍建物、5間×3間の大型建物（後述）と問題点を含んだものが多い。

掘立柱建物及び集落構造に関する論文・考察は近年多数出されており、建物個々の構造（平面プラン等）から、また集落全体の構成から、古代集落の性格・内容にせまっている。

当遺跡では調査面積が小さいため、集落の全体構造を把握するには至っておらず、ここでは建物個々の構造・規格について、富山・石川両県の掘立柱建物との比較を通して、当遺跡の性格を考えてみたい。

また、筆者の手落ちにより、昭和61年度調査区検出の建物1棟を報告できなかった。まずこの建物について報告し、その後に考察を行う。

なお、第1・2次の調査で番号の重複する建物があるので、以後は建物番号の前にローマ数字で調査年次を入れた記述（例：建物—I—01）を使う。

建物—I—05（第12・14図）

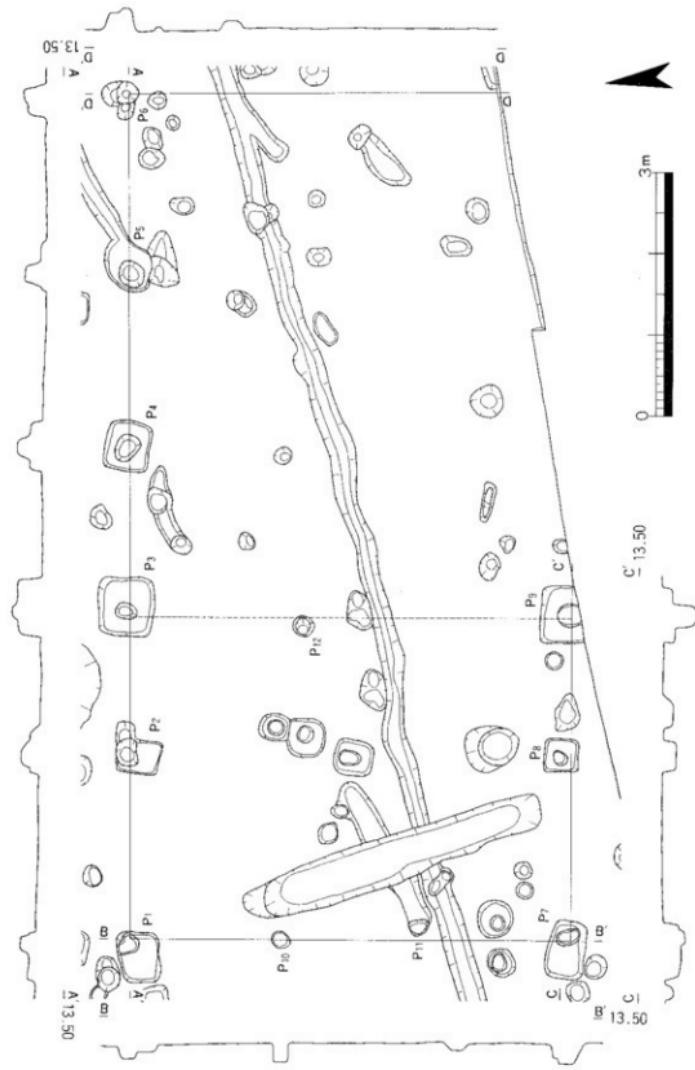
昭和61年度調査区北半で検出された、5間（10.65m）×3間（5.4m）の東西棟大型掘立柱建物である。建物—I—01～03と重複しており、R・E・R・Eを建物—I—01と共用している。建物方位は、南北柱列でるとN—11°—Eをさす。柱間寸法は、桁行が東から2.2m・2.2m・2.0m・1.8m・2.4m、梁行は1.8mの等間である。柱穴掘方は、Eが径30cmの円形、R・Eが径20cmの円形、E・Eが一辺40cm前後の隅円方形、他は一辺60～70cmの隅丸方形である。深さは18～41cmと、掘方に関係なく不揃いである。また、Eの掘方は他の桁行列の柱掘方と著しく異なっており、この建物は東妻廂をもつと考えられる。

なお、E・Eの柱穴掘方が他の柱穴に比して若干小さく、E・E間とE・E間の柱間寸法が不揃いであることから桁行3間の可能性も考えられ、この場合は身舎の桁行柱間寸法は4.2mの等間となる。しかしそうなると、この建物は桁行3間（5.4m）×梁行3間（10.65m）の附舍ということになり、構造的にかなり特異なものとなってしまう。こそこはやはり、5間×3間の建物とみたほうがよいであろう。

なお、参考までに、第1次調査で検出した建物の一覧を載せておく。

造構名	棟方向	柱間数	規 模	柱間寸法 m(尺)		平面積(m ²)	方 位	備 考
			桁×梁(尺)	桁	梁			
建物01	?	2×2	5.4×5.4 (18)(18)	2.7 (9)	2.7 (9)	29.2	N-11° - E (南北柱列)	
建物02	南 北 棟	2×2	5.4×4.8 (18)(16)	2.3, 2.5 (7.7) (8.3)	2.7 (9)	25.9	N-11° - E	
建物03	東 西 棟	3×2	6.6×5.4 (22)(18)	2.3, 2.3, 2.0 (7.7)(7.7)(6.7) 2.3, 2.0, 2.3 (7.7)(6.7)(7.7)	2.7 (9)	35.6	N-11° - E (南北柱列)	
建物04	南 北 棟	1×1	2.8×2.2 (9.3)(7.3)	2.8 (9.3)	2.2 (7.3)	6.2	N-11° - W	
建物05	東 西 棟	5×3	10.65×5.4 (35.5) (18)	2.4, 1.8, 2.0, 2.2, 2.2 (8) (6) (6.7) (7.3) (7.3) 2.2, 1.8 (7.3) (6)	1.8 (6)	57.5	N-11° - E (南北柱列)	東妻廂付

第2表 浦田遺跡昭和61年度検出掘立柱建物



第14図 遺構実測図 建物-I-05

(1) 据立柱建物の種類と集落の類別（第3表）

富山・石川両県の古代据立柱建物（ここでは概略7~11世紀のものを対象とする。）は、筆者の知る限りでは、43遺跡から443棟が検出されている。これは平面プランが明確なものだけの数であり、部分的に検出された建物は含んでいない。第3表は、それらを平面プラン別に集成したものである。

据立柱建物の類別には、平面プラン（柱間数）によるもの、構造（総柱か否か、有廻か無廻か）によるもの、平面積によるもの等多種あるが、ここではまず平面プランによって類別し、他の方法は随時必要に応じて用いてゆく。

据立柱建物の平面プランは、1間×1間から10間×3間まで21種類あり、多種多様である。しかし、種類別に検出数をみると、3間×2間が134棟（検出総数の30.2%）、2間×2間が82棟（同18.5%）と格段に多く、この2種で216棟と検出総数の実に半数を占めている。また、ほとんどの遺跡からこの2種のいずれかが検出されており、半数近い遺跡からは2種共に検出されている。のことから、現在通念となっていることではあるが、3間×2間と2間×2間の建物が古代における一般的な据立柱建物であったと知られる。ここで注目したいのが4間×3間と4間×2間の建物で、合計83棟（同18.7%）検出されており、前述の2種同様に、古代における一般的な建物と考えられる。

一方、特殊な建物としては、まず桁行5間以上の大型建物があげられる。検出数は48棟（同10.7%）である。大型建物に関する考察は、最近では新町II遺跡¹⁴⁾、千木ヤシキダ遺跡¹⁵⁾で行われており、集落の性格にまで言及したものには、横江庄遺跡の考察がある。いずれにおいても、大型建物の特殊性・類別・性格等について考察がなされているが、詳細は別項で述べることとする。

いま一つ特殊な建物として、3間×3間の建物があげられる。検出数も17棟（同3.8%）と少ないが、むしろ特定の遺跡から集中的に検出されている点が注目される。この建物の上屋構造を想定した場合、いかに考えても棟持柱が必要となり、他の建物に比してより高度な技術が必要とされる。これは遺跡の性格とも関連してくると考えられ、今後着目していくべき建物と言えよう。

集落の性格に関しては、構成する建物から検討したものと、建物グループから検討したものがある。この考察においては、両者の方法を必要に応じて使い分ける。なお、湯尻氏は石川県内に限定して古代集落を分類しているが、これは富山県にも適応しうるものと考える。参考までに、氏の分類の自分なりの解釈を記しておく。

I類 桁行5間以上で、平面積100m²を超える、一辺1m以上の方形掘方をもつ大型建物を主屋とする集落。（官衙ないし官衙的性格を有する集落）

II類 桁行5間以上で、平面積100m²前後の建物を主屋とする集落。（庄家等の莊園集落、寺院に関係する集落）

III類 庵をもつ建物ではなく、平面積50~30m²の建物群のみで構成され、建物の配置に規則性の見られる集落。（中核集落=公的性はさほど強くない、地域の中心となる集落）

IV類 平面積30m²前後の建物で構成され、建物の配置に明らかな規則性の見られない集落。（一般集落）

V類 壁穴住居で構成される集落（一般集落）

また、田嶋氏の建物グループによる検討は、構造の特質、階層性の現われ方、変遷の基本的な方向にまで論の及ぶ総合的なものであるが、ここでは建物小群の構造に限定して引用・参考とした。

さて、以後建物の種類別検討を行うのだが、その前に明確にしておきたい問題がある。それは、建物を建てるに際して、桁行及び梁行總長と柱間寸法の何れを主にして規格が為されたか、という問題である。これについては、「延喜式」に「建物を建てる際には、四隅の柱穴を決定し、その穴から振り始めるのが通有である」旨の記載があることなどから、前者が主であったと考えられる。よって以後、前者を主、後者を従とする観点で考察を進める。

柱間数		1 × 1	2 × 1	2 × 2	3 × 1	3 × 2	3 × 3	4 × 1	4 × 2	4 × 3	4 × 4	5 × 2	5 × 3	5 × 4	6 × 2	6 × 3	6 × 4	7 × 1	7 × 2	7 × 3	8 × 4	9 × 2	10 × 3		
遺跡名																									
富山県	じょうべのま遺跡(A・B地区)	2	1	2	1	5			1	1		2	3	2										1	
	高潮遺跡(石仏地区)					2			2																
	高潮遺跡(穴田地区)					14			1		8			1											
	佐伯遺跡	2	2	4			13		2	2															
	桜町遺跡(産田地区)		2	5		13			2	2															
	東江上遺跡		2	2		3			1	1															
	新町II遺跡	1	1	5		1			1	1			1	1											
	浦田遺跡			3		3																			
	長岡杉林遺跡					1																			
	安田・寺町遺跡																								
石川県	黒川尺目遺跡																								
	小杉流通業務団地内No.7遺跡	1	1	2		1																			
	小杉流通業務団地内No.16遺跡																								
	小杉流通業務団地内No.18遺跡		1	1																					
	計 (117棟)	8	6	27	1	42			1	10	10		3	6	2									1	
	柳田シャコデ遺跡	1		2			1					3			1									1	
	美麻郡比古神社前遺跡																								
	宮地魔寺																								
	北川尻ホシバ山遺跡																								
	徳前C遺跡	1	2	1		9			1	2	1														
福井県	八幡昔谷遺跡	1	1	1		1			3																
	横江生庄家跡																								
	藤江A遺跡																								
	御経塚B遺跡																								
	西島遺跡																								
	寺家遺跡(砂田地区2下層)	4	3	10		19	5		2	2	1	1	1	1	1									2	
	寺家遺跡(砂田地区4層)		1	1		2			2	4															
	津波食遺跡																								
	大野木タキシロ遺跡																								
	法仏遺跡B地区	2	1	1		3	1		1	2	2	1													
富原市	" B' 地区	4	2	2		1			1	2	2	4													
	" C・D地区	3	2	1		1			1	1															
	" I地区	2	1	1		1			1	2	1														
	" O地区																								
	" L地区																								
	安原工業閉地遺跡																								
	安養寺遺跡	1	1			1																		1	
	末松庵寺																								
	戸水C遺跡	2	2	6					1	2	1	1		1									1	2	
	佐々木ノテウラ遺跡		3	2		2			4																
漆原町	中村畠遺跡	2	1	1		3			1			4													
	古府タブノキダ遺跡		1	1		3			1			1													
	三井小泉遺跡	3	3	3	1							2			1	1							1	1	
	近岡ナカシマ遺跡		4	2	2							2			1	1									
	千木ヤシキダ遺跡		2	1		1						1													
	筑田無量寺遺跡	1	1	1		4						1													
	藤原シンゴウ遺跡		1	1		3						1													
	永町ガマノマガリ遺跡(C・D群)	1	8	1	4				1	6				3											
	上二口					1																			
	漆町チュウアン地区	5	2	3	4	1	2																		
" フルミヤ地区	6	3	6	13	3	1	1	2																	
	" ヘゴジマ地区	1	1	1	3				1	2															
篠原遺跡		1			3																				
	計 (326棟)	7	36	55	14	92	17	5	31	32	1	6	8	1	3	6	2	1	5	1	1	2	1		
総 計 (総計443棟)		15	42	82	15	134	17	6	41	42	1	9	14	3	3	6	2	1	5	1	1	2	1		

第3表 富山・石川両県の古代掘立柱建物の平面プラン

16) 横江庄遺跡、「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」、新町II遺跡に加筆)

(2) 梁行1間の建物について（第15図）

19)

梁行1間の建物には、桁行1間・2間・3間・4間・7間の5種がある。この中で、7間×1間のものは塗町遺跡フルミヤ地区の1例のみで、報告書にも「柱間寸法が不揃いであることから、東より2~3間、2間、1間の建物に分割して理解した方が良いかもしない」とあり、かなり特殊なものである。4間×1間と3間×1間の建物は検出遺跡が限られており（第3表）特異性が感じられるが、規格・配置についての規則性は見い出せなかった。よって、ここでは配置に規則性のみられる2間×1間建物について述べる。

2間×1間建物

2間×1間建物は納屋及び類似施設と考えられており、検出数42棟とごく一般的な建物である。

この中で注目されているのは、法仏遺跡C・D地区の8・9号建物で、建物小群の中心となる大型建物桁行柱筋に備えて付設されている。同様な例は新町II遺跡においてもみられ、報告書には「…大型の建物が構築された遺跡では、それに接して小型の建物が付属することを示すものであろう」とある。今、仮にこれをa類とする（第15図①）。

これに対して、当遺跡で検出した例は、2間×2間建物（建物-II-02・17.9m²、II-03・16.8m²）に2間×1間建物（建物-II-04）が付設しており、前記のものとは若干内容が異なる。同様な例としては、法仏遺跡C・D地区13号建物（3間×3間、27.9m²）と11号建物（2間×1間、15.4m²）、寺家遺跡砂田地区S B38（3間×2間、34.0m²）とS B39（2間×1間、12.6m²）等がある。ただ、法仏・寺家両遺跡の建物（13号建物・S B38）が平面積30m²前後の平均的住居であるのに対して、浦田遺跡のそれは倉庫に多い平面積20m²以下の2間×2間建物である点が特殊である。しかし、倉庫に納屋が付設していると考えるより、住居に納屋が付設していると考えの方がやはり自然であろう。これをb類とする（第15図②）。

では、a類とb類の相違は何に由来するのであろうか。これを考える鍵となるのは法仏遺跡C・D地区の例で、9・10号建物を含む建物小群とII・13号建物とが重複しており、両者はさらに12号建物と重複している。これは3者の構築時期に差があることを示しており、a類とb類の相違は時期差によるものと考えられる。なお、法仏遺跡は報告書が未刊行であるため、両者（及び3者）の構築順序は不明である。ただし、9~13号建物の柱穴掘方は全て凹形と同一であり、方位も似通っていることから、大きな時期差はないと考えられる。



① 富山県浦田遺跡遺構分布図 0 5m



② 石川県法仏遺跡C・D地区遺構分布図
〔田嶋 1983〕に加筆

第15図 a+b類建物小群配置図

(3) 2間×2間建物について (第16図、第4表)

2間×2間建物は、3間×2間建物に次いで普遍的に見出される建物である。構造面から、東柱を持つ総柱のものと普通構造のものに分けられる。これを面積・構造別に分けて傾向をみたのが第4表である。なお傾向をみると際しては、地域のまとまりを考慮して、富山県を呉東、呉西に、石川県を中・奥能登、口能登、加賀に小区分して行った。

総柱構造の建物

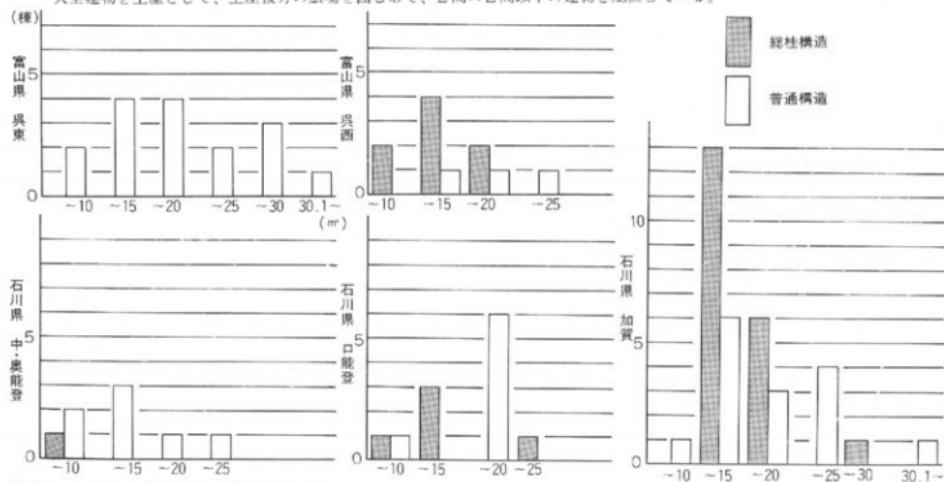
総柱建物は34棟が検出されており、平面積20m²以下のものが32棟と大部分を占める。東柱の存在は荷重対策とされ、一般に倉庫と考えられている。加賀においては、①29棟(82.9%)が面積20m²以下、②20棟(57.1%)が総柱建物と、この見解を裏付ける傾向がみられる。また、呉西では①・②両傾向が、能登では①の傾向がみられ、加賀と同様のことが言えよう。ここで問題になるのが呉東で、総柱建物は1棟もみられない。しかし、呉東に2間×2間建物の倉庫が全く存在しなかったとは考えられず、総柱以外の方法で荷重対策を行っていたと考えられる。

普通(無東柱)構造の建物

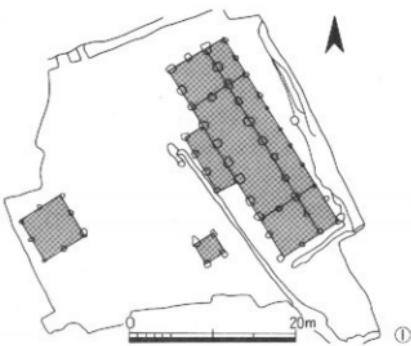
現在48棟が検出されており、以下の理由から、平面積20m²を境に性格が変化すると考えられる。第一は、20m²を境に2間×2間建物全体の中での構造別比率が大きく変わることである。すなわち、平面積20m²以下では総柱建物が32棟(47.8%)と約半数であるのに対して、20m²超では2棟(14.3%)と激減するのである。これは、20m²超のものが倉庫以外の住居などであったか、特殊な役割の倉庫であったかのいずれかを意味しているといえよう。第二は、20m²超の建物を検出した9遺跡の内、6遺跡から大型建物が検出されていることである。そして、全14棟中の7棟が、大型建物に伴って建物小群を構成しており、一層の特殊性を感じさせる。よって以後、個々の例についてみていくこととする。

大型建物に伴って建物小群を構成するものは、前記のとおり7棟あるが、これらは伴う大型建物の種類と建物の配置から1~4類に分類される。

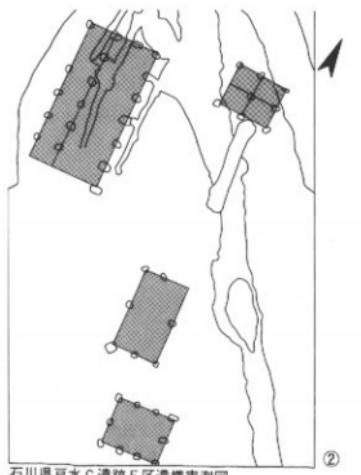
1類は、じょうべのま遺跡B期の建物小群を標式とする(第16図①)。平面積100m²以上の附帯建物を主屋とし、主屋後方の広場を囲む形で、2間×2間をはじめとした建物を配置する。なお、当類に属するものとして戸水C遺跡F区があげられる(第16図②)。この遺跡の2間×2間建物は総柱構造であるが、面積は25.8m²と例外的に大きく、やはり大型建物を主屋として、主屋後方の広場を囲む形で、2間×2間以下の建物を配置している。



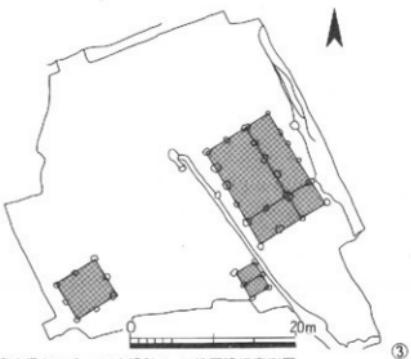
第4表 2間×2間建物の構造と面積別分布



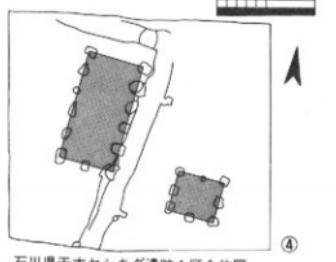
富山県じょうべのま遺跡A地区遺構実測図
〔高島他 1974〕より作成



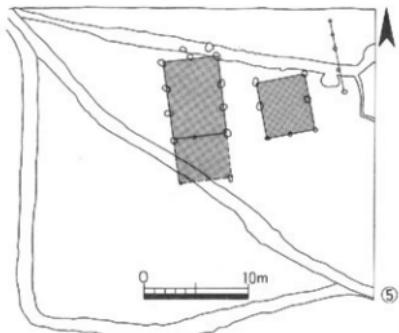
石川県戸水C遺跡F区遺構実測図
〔戸溝 1986〕より作成



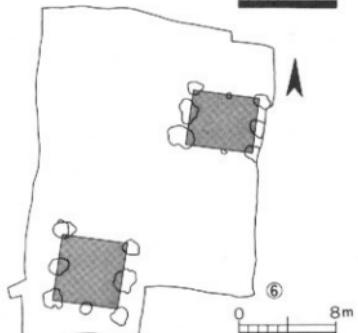
富山県じょうべのま遺跡A・U地区遺構実測図
〔高島他 1974〕より作成



石川県干木ヤシキダ遺跡A区全体図
〔楠 1987〕より作成



石川県佐々木ノテウラ遺跡遺構全体図
〔北野 1986〕より作成



石川県干木ヤシキダ遺跡F区全体図
〔楠 1987〕より作成

2類は、じょうべのま遺跡C期の建物小群を標準とする（第16図③）。建物の配置は1類と同じであるが、主屋の平面プランはむしろ3類に近いため、別類とした。現在、類例は見出せない。

3類は、千木ヤシキタ遺跡A区の建物小群を標準とする（第16図④）。面積50m²以上の建物を主屋として、後方（前方か？）の広場を囲む形で、2間×2間以下の建物を配置している。なお、同遺跡D区では2間×2間建物が2棟しか検出されていない（第16図⑥）、矩形の配置から広場を想定してここに加えた。

4類は、佐々木ノテウラ遺跡III期の建物小群を標準とする（第16図⑤）。主屋は面積39.0m²とやや小さく、2間×2間建物が隣接して広場は無い。主屋が大型建物ではないが、比較のため設定した。

以上の分類を湯尻氏の集落類型にあてはめると、1～4類は各々I～IV類集落に対応するであろう。I～III類集落は、程度の差はあるいすれも公的性格を帯びた集落であり、そのような集落の主屋を中心とした建物小群に属するということは、この種の2間×2間建物も、公的性格の一端を担っていたと考えられる。

次に面積20m²以下のものについてみると、配置の面からは、2間×1間建物の項で述べた住居と考えられるもの、東江上遺跡の2棟併設した倉庫と考えられるものなどさまざまであり、建物自体からも規格や規則性は見出せなかつた。現時点では、集落内の位置関係から性格を推測すべきであろう。

（4）梁行2間以上建物の寸法規格について（第5表）

梁行2間以上の建物には2間×2間から10間×3間まで16種あるが、ここでは居住の用に供したと考えられる3間×2間から10間×3間までの建物を対象とし、用途の異なる2間×2間建物は除外する。ところで、対象となる建物を平面プランからみると、長方形プラン（梁行と桁行の柱間数が異なるもの）と正方形プラン（梁行と桁行の柱間数が同じもの）に2分類され、別の規格が存在したかとも受け取れる。しかし、正方形プラン建物（3間×3間と4間×4間がある）の平面形態をみると、正方形に類するものは18棟中3棟にすぎず、長方形プランに準じていると考えて一括して扱った。

さて、最初に述べたように、寸法規格は梁行及び桁行の総長を主として示されていると推定される。また、建物の面積の増減は桁行柱間数・総長を変えて行われており、梁行は必要最小限の変化に止めている傾向がある。すなわち梁行総長には、少しの面積変化には左右されない規格の存在が想定されるのである。よってここでは、建物の梁行総長について、建物の性格が変わると考えられる面積25m²未満、25m²以上50m²未満、50m²以上100m²未満、100m²以上の4種に分けてみていくこととする。なお、記述の煩雑さを避けるため、ここでは面積25m²未満のものを小型建物、25m²以上50m²未満のものを一般建物、50m²以上100m²未満のものを大型建物、100m²以上のものを超大型建物と呼称する。

平面積別と地域別の傾向（第5表）

寸法規格の傾向をみると、地域のまとまりを考慮して、富山県を呉東、呉西に、石川県を中・奥能登、口能登、加賀に小区分して行った。また、梁行柱間数の異なるものについては、検討は別個に行なったが、煩雑となるため表には表わさず、必要な場合は随時記述する。

小型建物においては、呉東と呉西では13尺、中・奥能登では12尺という最高頻度を示す寸法が存在し、これが各地域の基準となる寸法（以下、基準寸法と記す）であったと考えられる。加賀では11尺～14尺まで一様に高い頻度を示しているが、隣接する口能登の傾向から、14尺が基準寸法であったと推測される。その口能登では最高頻度を示す寸法が2種あるが、隣接地域との比較により、13尺は呉西の、14尺は加賀の影響を受けたものと考えられる。

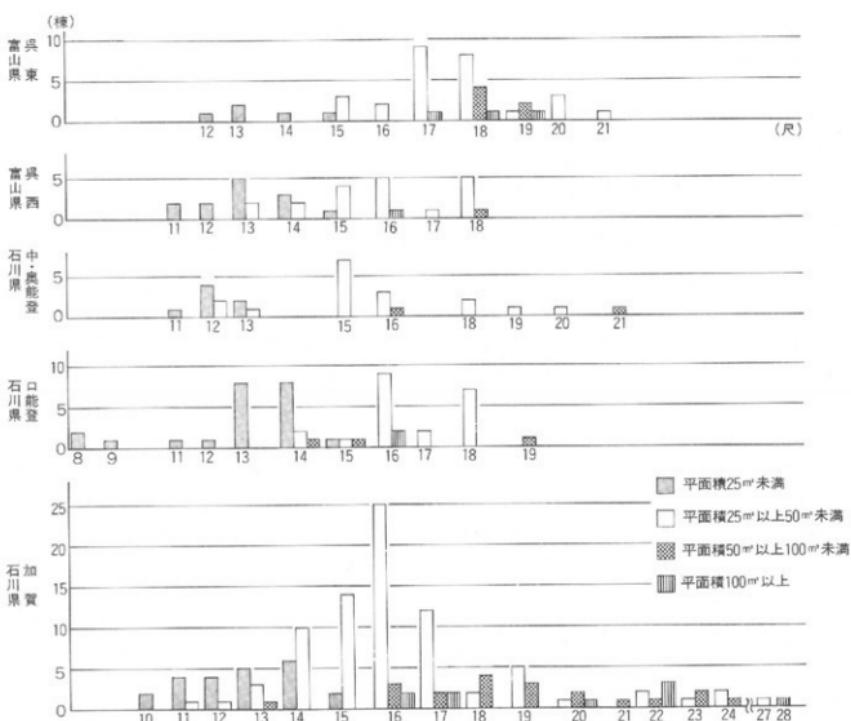
一般建物においては、最も特徴的かつ興味深い傾向が出ており、加賀では16尺、中・奥能登では15尺という圧倒的な頻度を示す寸法が存在し、基準寸法の存在を示している。呉東においては、17尺と18尺の2種が圧倒的であるが、隣接する呉西の傾向から18尺が基準寸法であろうと推察される。なお、口能登と呉西は、その地理的要因（第17図）

からか、隣接地域の影響が濃い。すなわち、口能登では16尺と18尺の頻度が高いが、16尺は加賀の、18尺は呉東の影響とみることができる。また、呉西では16尺と18尺に加えて15尺も頻度が高く、中・奥能登の影響とみられる。ここ呉西ではさらに、梁行3間のものは18尺、2間のものは16尺という、寸法の使い分けを行っている点も注目される。これは、同様に2種の基準寸法と柱間数を用いている口能登ではみられない傾向であり、たいへん興味深い。

大型建物においては、他地区では検出数の少いこともあってか、呉東と加賀にしか傾向を見出せなかった。呉東では規格が18尺と19尺に限られており、中でも一般建物と同じ18尺の頻度が高く、同一基準寸法の使用を窺わせている。加賀では13尺から24尺まで多種の規格が存在するが、中でも16尺・18尺・19尺の頻度が高い。なお16尺は一般建物では主流を占めていたが、大型建物に



第17図 地域区分図



第5表 梁行2間以上建物の面積別梁行総長の傾向

においては主流はむしろ18尺と19尺にあるとみられる。

超大型建物においては、規格は16尺から28尺まで多岐にわたり、加賀で22尺が頻度の高いこと以外は傾向を見出せなかった。これは絶対数がないことも理由の一つであり、以下は推測になるが、地域的な規格よりもむしろ集落の性格による規格の存在した可能性が強い。

寸法規格と地域性

以上の検討からまず気付くことは、地域別に寸法規格が存在し、それが他地域へも影響を及ぼしている点である。独自の規格を持っているのは、興東、中・奥能登、加賀の3地域であり、興西と口能登は前記3地域からの影響を強く受けている。これは単に建物の規格についてだけとは考えられず、文化的・政治的影響の下地に立脚したことであろうと推測される。また、口能登に存在しない15尺の規格が興西において存在するなど、各地域間の交流の疎密とも関連があると考えられる。

次に注目されるのは、規格の性質の違いである。前述した地域性をもつ規格は小型・一般建物にみられるもので、大型建物では、興東と加賀の規格が共に18尺と19尺に集中しているように、地域性を超えた規格の存在を窺わせている。また超大型建物においては、規格の集中が見られず、戸水C遺跡の9号建物と12号建物のように、同一集落内にあっても規格の異なっているもの（方向性は揃えている）があり、建物自体の性格によって規格を使い分けた可能性も考えられる。

（5）大型建物について

ここでいう大型建物とは、桁行5間以上、平面積50m²以上の建物をさす。この大型建物は、平面積100m²を境に有庵の比率が激増するなど性格が変わるので、平面積100m²以上と未満に分けて検討を行う。なお、官地庵寺と末松庵寺の建物に関しては、寺院に関する特殊例として除外した。²⁸⁾²⁹⁾

さて、大型建物の規格類別に関する最近の論考としては、千木ヤシキダ遺跡の報告書の考察があり、梁行と桁行の比率から分類が試みられている。これによると、C₁群（比率2：1）は初期莊園庄家の主屋級建物、E群（比率4：1）は国家的祭祀施設の中心建物とされまとまっているが、D群（比率3：1）には莊園の主屋と付属棟及び官衙関連施設など多種の建物が属しており、また莊園の主屋とされているじょうべのま遺跡S B O 1 O は単独でF群（比率4以上：1）に属しているなど、完全な類別には至っていないようである。前項で行った梁行絶長の比較においても、平面積100m²以上の建物については傾向が出ず、建物単体による比較では規格は出て来そうにない。よってここでは、平面積100m²以上の建物については、まず建物小群の配置によって分類し、その分類に従って性格や規格の検討を行う方法をとる。

平面積100m²以上の建物

この種の建物を含む建物小群は、次の3種に分類される。

A類…主屋と脇屋及び付属棟で構成され、主屋前方の広場を囲んで配置される。

B類…配置はA類とはほぼ同じだが、主屋に比して脇屋が小さく、前方の広場も完全にとり囲まれている。

C類…A類の構成に倉庫が加わり、主屋後方の広場を囲んで配置される。

以上の分類により、以後各類に属する建物について検討する。

A類に属するものには、高瀬遺跡S B O 1 O（を含む建物小群、以下同じ。）、横江庄遺跡庄家跡S B O 1 がある。両者は共に初期莊園の庄家主屋と考えられており、先の楠氏の分類においても共にC₁群に属している。建物配置を含めて、初期莊園庄家の典型と考えられる。³⁰⁾

B類に属するものには、寺家遺跡S B O 1 A・Bがある。この建物は国家的祭祀施設の中心建物と考えられており、中央に廟のある特異な平面プランも、他の構成建物に比して格段に大きい主屋も、現在の神社（大社級）を思えば納

得されるであろう。

問題になるのがC類で、C類に属するものには、じょうべのま遺跡S B010・016・017、戸水C遺跡12号建物がある。第1の問題点は、建物の構成・配置を同じくしながら、じょうべのま遺跡は莊園の庄家、戸水C遺跡は官衙関連施設と異なる性格が与えられている点である。第2は、主屋本体の規格にも、身舎梁行総長が5.0m（16.7尺）という共通点のみられることである。さらに、両者に付設している倉庫にも、先述（2間×2間建物の項参照）したとおり共通点がみられる。これだけ共通点を持ちながら、両者の性格が異なっているとは何故なることであろうか。これを考えるには建物からばかりではなく、遺物や立地なども総合的にみる必要があり、一朝一夕に解決できる問題ではないので、ここでは問題提起として止める。なお参考までに、この両者と梁行総長を同じくするものとして、莊園の庄家³⁴⁾とされている藤江A遺跡S B01がある。

このように、C類の性格付けには問題点が残るが、A類・B類に関しては建物小群としての構成・配置を含めて、各々類型を認めることができると考える。なお、A類の建物小群に倉庫が見られない点については、倉庫群として存在し、その立地は当時の主たる輸送手段であった水運の便を考えてなされたと考えられる。

平面積100m²未満の建物

この種の建物には、建物小群の主屋、平面積100m²以上の建物の付属棟の2種がある。前者の中で注目されるのは納屋を付設した建物であるが、これについては2間×1間建物の項で述べてある。後者については、特別の規則性を見出すには至らなかった。

（6）妻廂を持つ建物について

現在のところ検出されている妻廂付き建物は僅か7棟（総検出数の1.6%）であり、極めて特異な平面プランと言える。平面積はまちまちで、最小のものは寺家遺跡S B06で13.0m²、最大のものは当浦田遺跡の建物—I-05で57.5m²とかなりの開きがある。

この建物で注目されるのは、平面積100m²以上の建物に付設されているものが、じょうべのま遺跡S B028、横江庄遺跡庄家跡S B04、寺家遺跡S B06と3棟ある点である。7棟中の3棟ではさして特殊性は感じられないが、他の建物の状況をみるとこれが浮上してくる。すなわち、浦田遺跡建物—I-05、佐々木ノテウラ遺跡6号建物は調査区の端に位置しており、周囲の状況が明確ではない。また法伝遺跡B'地区は純柱建物が多く、中世建物への移行期と考えられており、1号建物も純柱（あるいは両廂）の可能性がある。このように見てくると、確実に単独で存在しているのは法伝遺跡B'地区の4号建物ただ1棟となり、前記の特殊性が一層可能性をもつと言えよう。

（7）浦田遺跡の性格について

当遺跡の性格については、調査面積がごく狭いこともあり、集落構造面からの言及は不可能に近い。よって、遺構・遺物に加えて文献の面からそれぞれ検討し、かかる後に総合的に判断することとする。

まず遺構は、部分的に確認されたものを含めて17棟検出されており、これらの建物の中で注目すべきものとして、①5間×3間の妻廂付大型建物、②平面積25m²を超える2間×2間建物2棟、③廂付建物の存在があげられる。①・②は平面積100m²以上の大型建物の存在を窺わせるものであり、③の存在も考えると、湯尻氏の分類のII類集落とIII類集落の中間に位置するといえよう。

次に遺物面からみると、当遺跡には綠釉・灰釉等の陶器類は全く無く、墨書き器すら一点も出土していない。また、出土遺物をみても、供膳形態は須恵器、煮沸形態は土師器と、該期の一般農村と全く同じであり、遺構の特徴と比較した場合、理解に苦しむものである。なお遺物が最も多いのは9世紀代である。

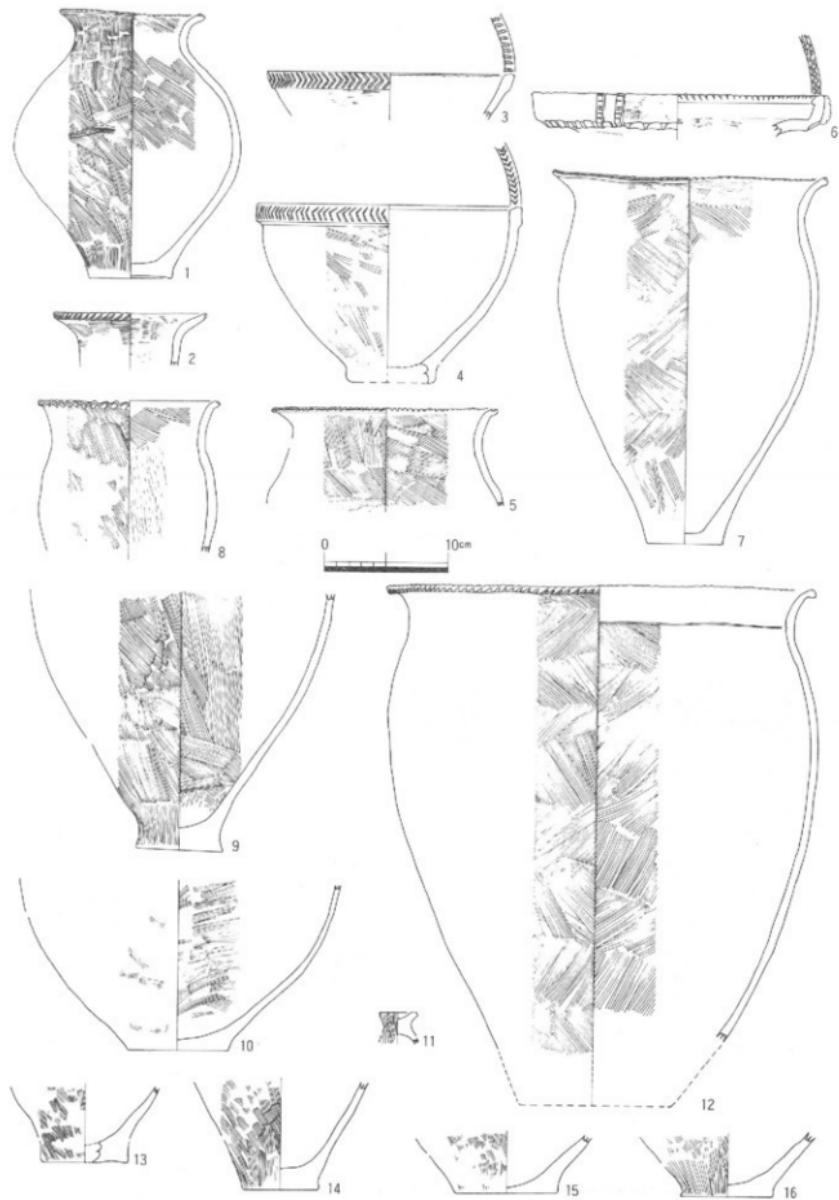
文献学上からは、当遺跡の所在する浦田地区周辺は「東大寺領大蔵莊」に比定されており、存続期間は8世紀中頃³⁵⁾から10世紀末と考えられている。

以上から考えると、当浦田遺跡が莊園内の一画を占めていたことは間違いないであろう。そしてその性格については、遺物から庄家城と考えるのは無理であり、特殊な植物の存在から、莊園管理の一端を担っていた集落と考えておきたい。その役割が何であったかは、周辺地域の調査や古代条理制の復原を通して、「大蘇莊」の全景復原と共に解決すべき問題であろう。

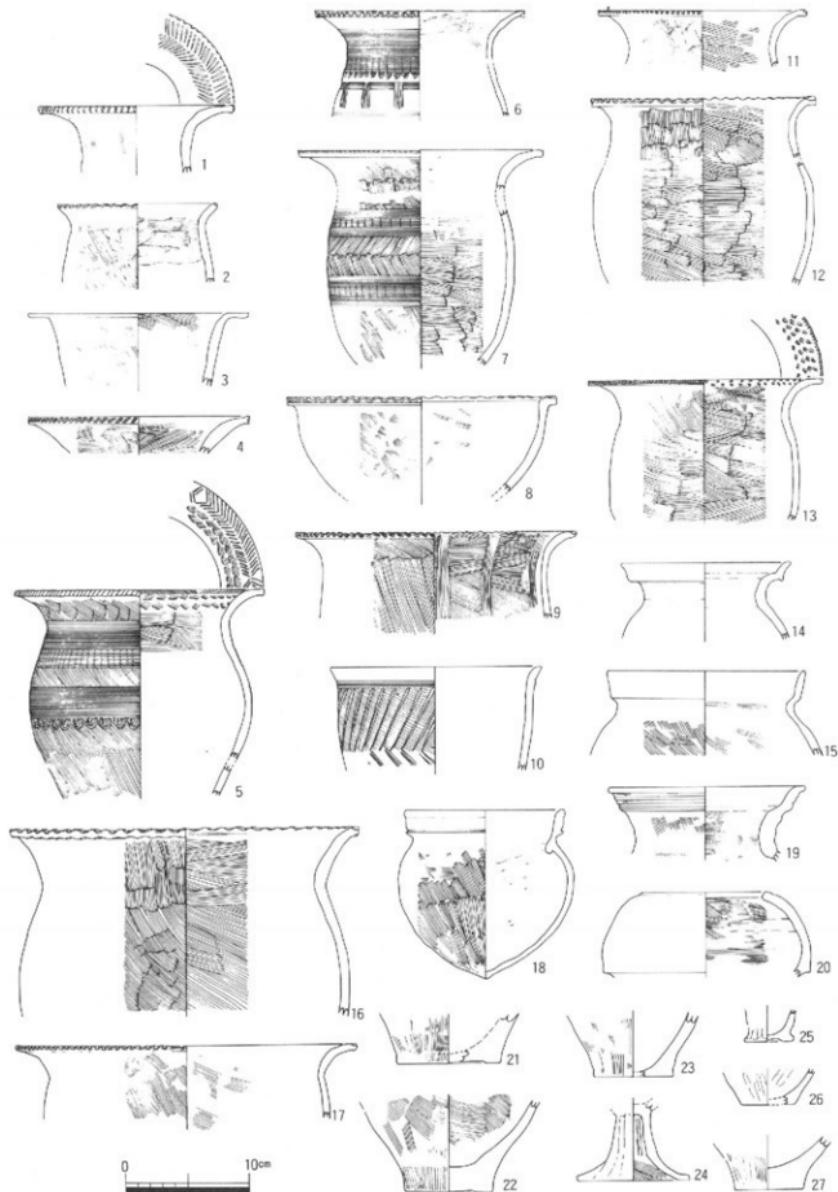
(森)

註

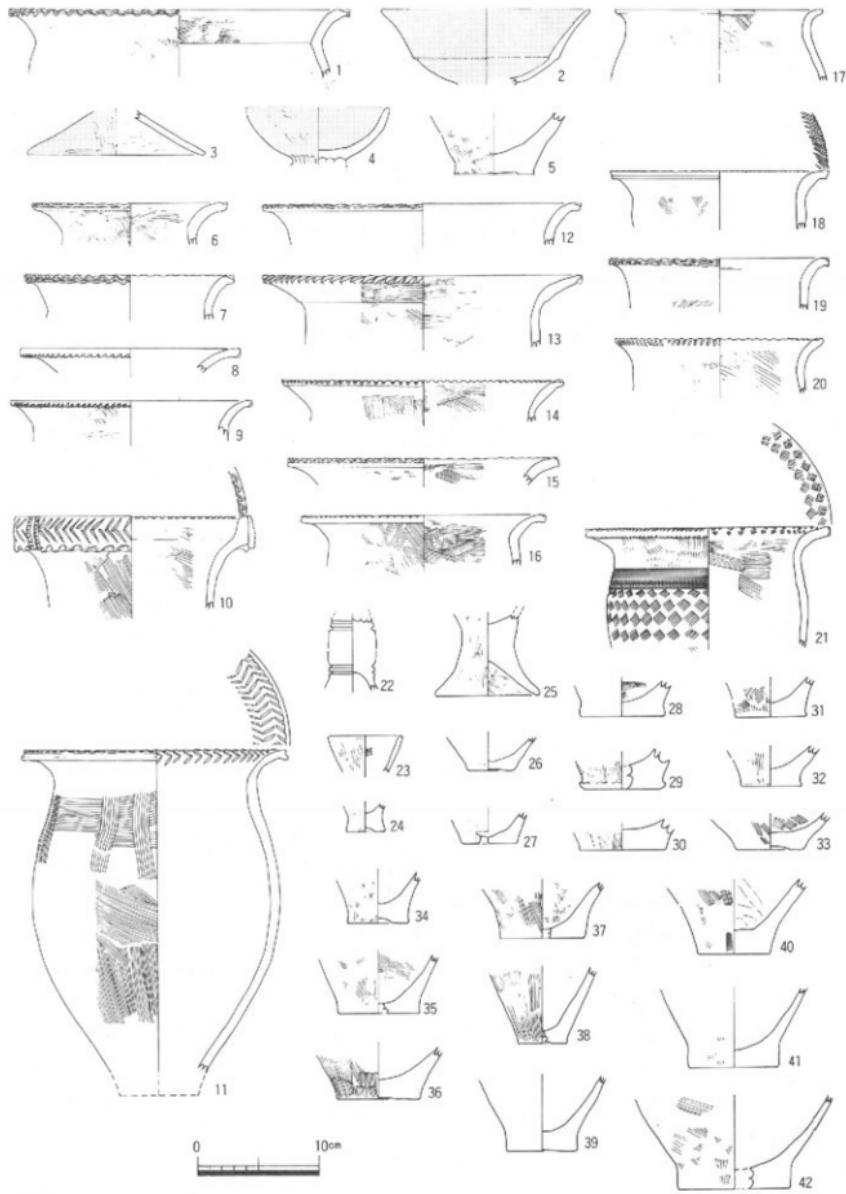
- 1) 安田良栄 1977 「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻
- 2) 中島俊一・鶴圭夫 1975 「安養寺遺跡群発掘調査概報(安養寺・柴木・部入道地区)」石川県教育委員会
- 3) 小島後藤 1972 「富山県滑川市・上市町 本江・庄野新道跡調査概報」富山県教育委員会・滑川市教育委員会・上市町教育委員会
- 4) 以下、繩文時代の遺物については酒井重洋氏に御教示を得た。
- 5) 池野正男 1987 「2. 浦田遺跡(8)平安時代の遺物」『庄遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』立山町教育委員会
- 6) 以下、平安時代の遺物については宇野隆夫氏・池野正男氏に、中・近世の遺物については宮田進一氏に御教示を得た。
- 7) 上野 幸 1972 「6弥生時代附古式土器類」『富山県史』考古編
- 8) 石原与作 1977 「古代の莊園と条理」『立山町史』上巻
- 9) 奥田淳爾 1976 「東大寺の墳田地」『富山県史』通史編I原始・古代
- 10) 湯尻修平 1978 「畠遺跡の状態と遺構、▼まため」『鹿島町徳前C遺跡調査報告(I)』石川県教育委員会
- 11) 斎藤外二 1955 「旧福野潟及びその周辺の地形」『石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告書』石川県考古学研究会々誌第7号 石川県考古学研究会
- 12) 横 正勝 1987 「第3章遺構、第5章まとめ第1節遺構」『金沢市千木ヤシキ遺跡』金沢市教育委員会
- 13) 飯塚卓二・井川達雄・女屋和志雄 1984 「第II章検出された遺構と遺物第6節墓址」『熊野堂遺跡(1)』群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 14) 岸本雅敏 1986 「▼新町II遺跡の古代掘立柱建物群の性格」『新町II遺跡の調査』婦中町教育委員会
- 15) 註12) に同じ
- 16) 湯尻修平 1983 「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江莊遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 17) 註16) に同じ
- 18) 田嶋明人 1983 「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡—加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚え書き」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号 石川考古学研究会
- 19) 田嶋明人・越坂一也・山本直人・田中考典・横山そのみ 1986 「畠遺構・遺物」『漆町遺跡1』石川県立埋蔵文化財センター
- 20) 註18) に同じ
- 21) 註14) に同じ
- 22) 小嶋芳孝 1986 「稚砂田地区の遺構」『寺家遺跡発掘調査報告1』石川県立埋蔵文化財センター
- 23) 高島忠平・狩野久・山中正敏・橋本正・舟崎久雄 1974 「▼ようべのま遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書田』富山県教育委員会
- 24) 戸瀬幹夫 1986 「第3章第7節主な遺構と遺物」『金沢市I水C遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 25) 註12) に同じ
- 26) 北野博司 1986 「第4節III期の遺構と遺物」『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 27) 岸本雅敏 1981 「8東江上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町遺構編一」上市町教育委員会
- 28) 小森秀三 1977 「宮地庵寺跡併せて確認発掘調査報告」加賀市教育委員会
- 29) 河原純之・吉岡康暢 1976 「史跡末松庵寺」野々市町教育委員会・1968「末松庵寺跡(第2次発掘調査概要)」文化財保護委員会・石川県教育委員会・野々市町教育委員会
- 30) 註12) に同じ
- 31) 阿部義平・狩野久・橋本正・舟崎久雄 1974 「高瀬遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書田』富山県教育委員会
- 32) 吉岡康暢・金山顯光・西野秀和・溝井真 1983 「第一部調査編」『東大寺領横江莊遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 33) 註22) に同じ
- 34) 四柳憲章 1971 係埋蔵文化財調査団
- 35) 註8) に同じ
- 36) 註9) に同じ



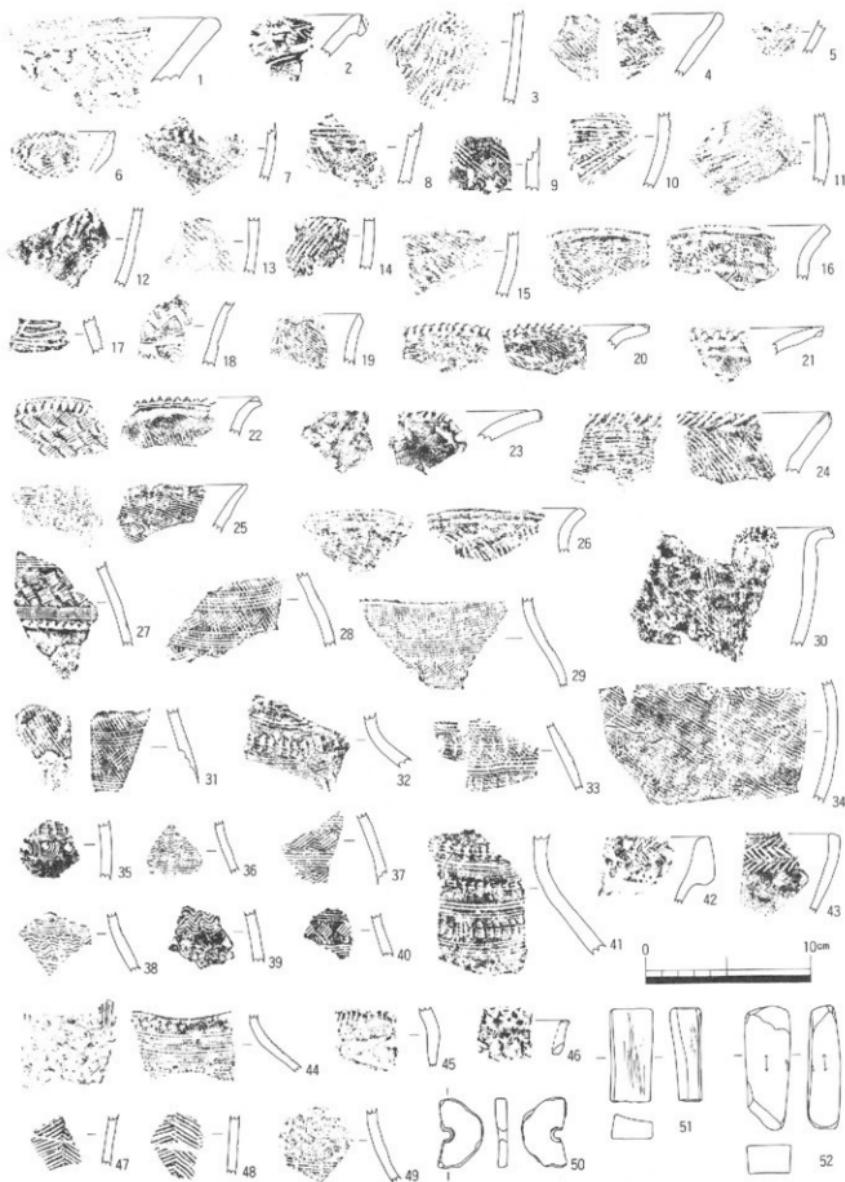
第18図 昭和61年度調査区出土遺物実測図 8・9.溝-03 1~7・10~16.溝-05



第19図 昭和61年度調査区出土遺物実測図 4・5・8・16.穴-05 9・10・27.穴-08 1・3・6・7・11～13・21～25.穴-09
14・17・26.溝-08 15・18・20・24.溝-09



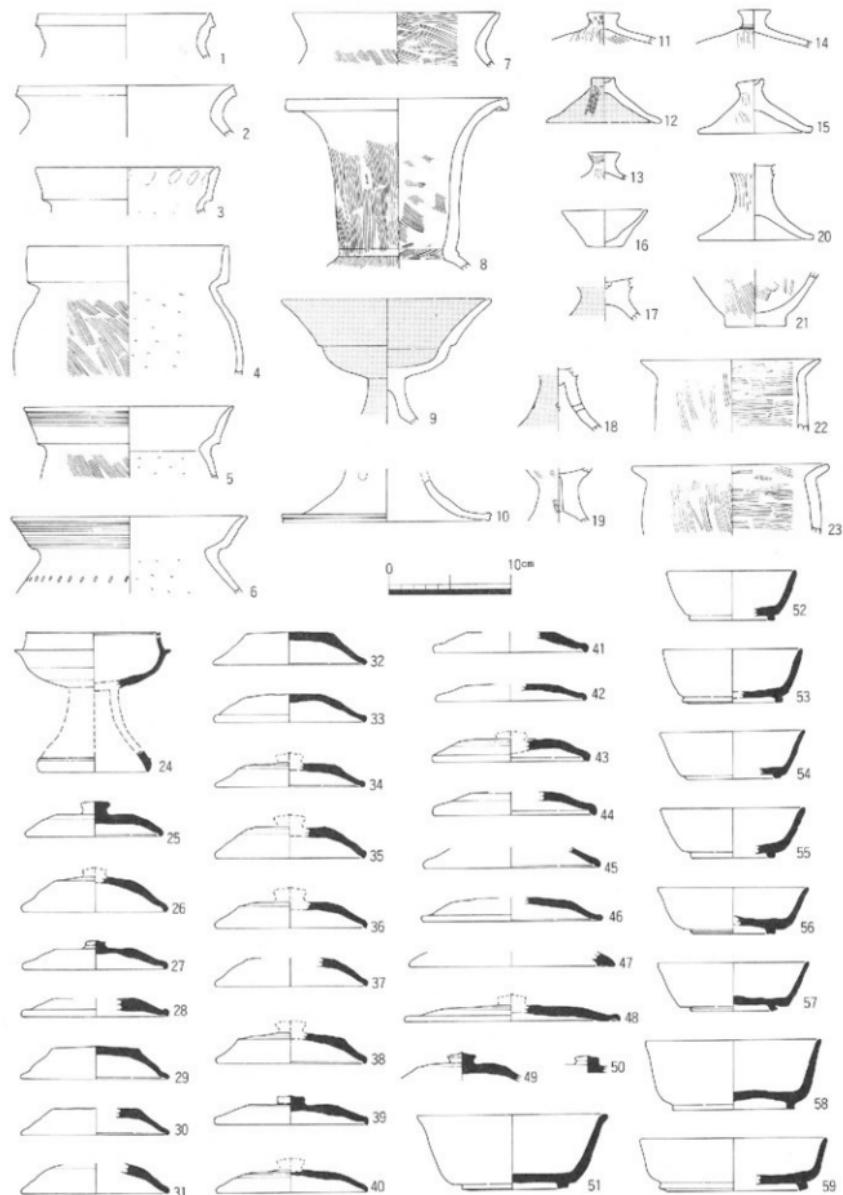
第20図 昭和61年度調査区出土遺物実測図 1~5.溝-10 その他.包含層



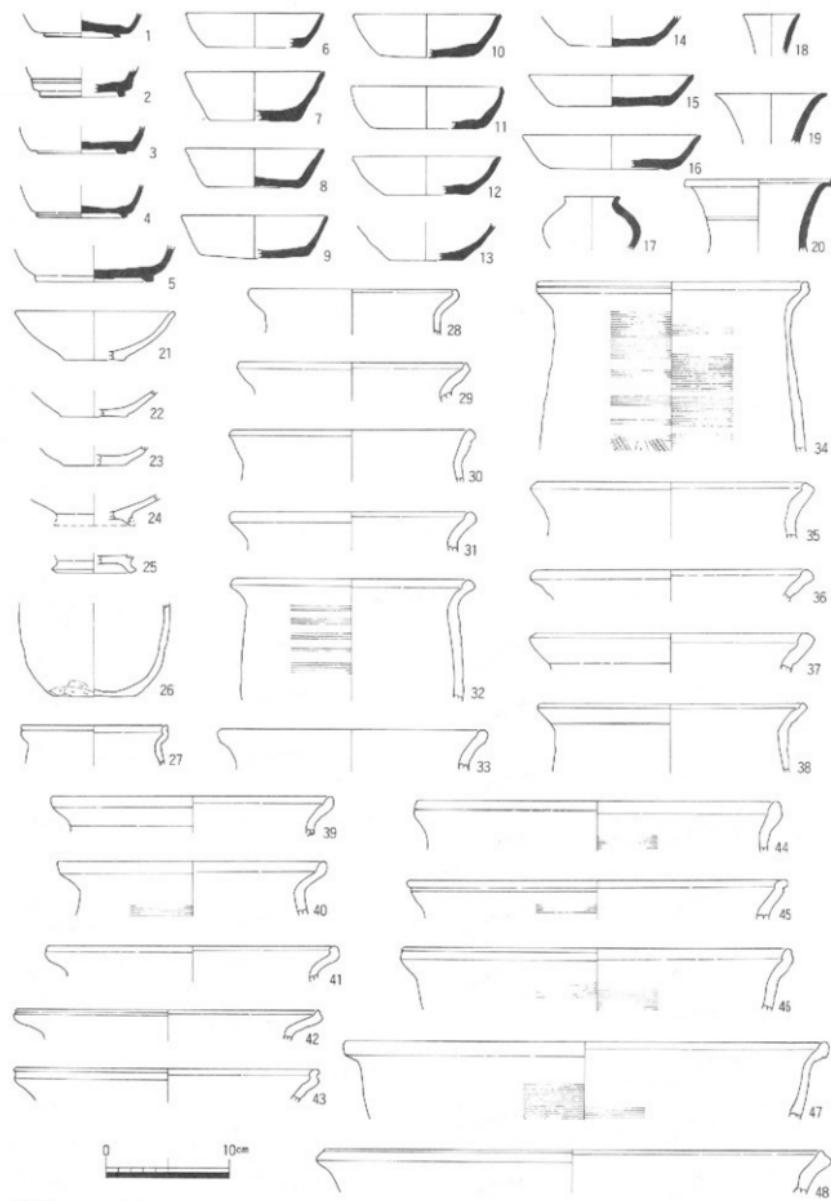
第21図 昭和61年度調査区遺物拓影・実測図 24・47・48.穴-05 22.穴-09 32.穴-15 4.溝-03

20・25・27・31・35・37・39・40・50.溝-05

8・41.溝-08 13・16・18・26.溝-09 その他.包含層



第22図 昭和61年度調査区出土遺物実測図 38.穴-20 54.穴-34 その他、包含層



第23図 昭和61年度調査区出土遺物実測図 6.建物-01・P5 18.建物-03・P8 26.溝-12 32.建物-01・P1 34.穴-その他、包含層

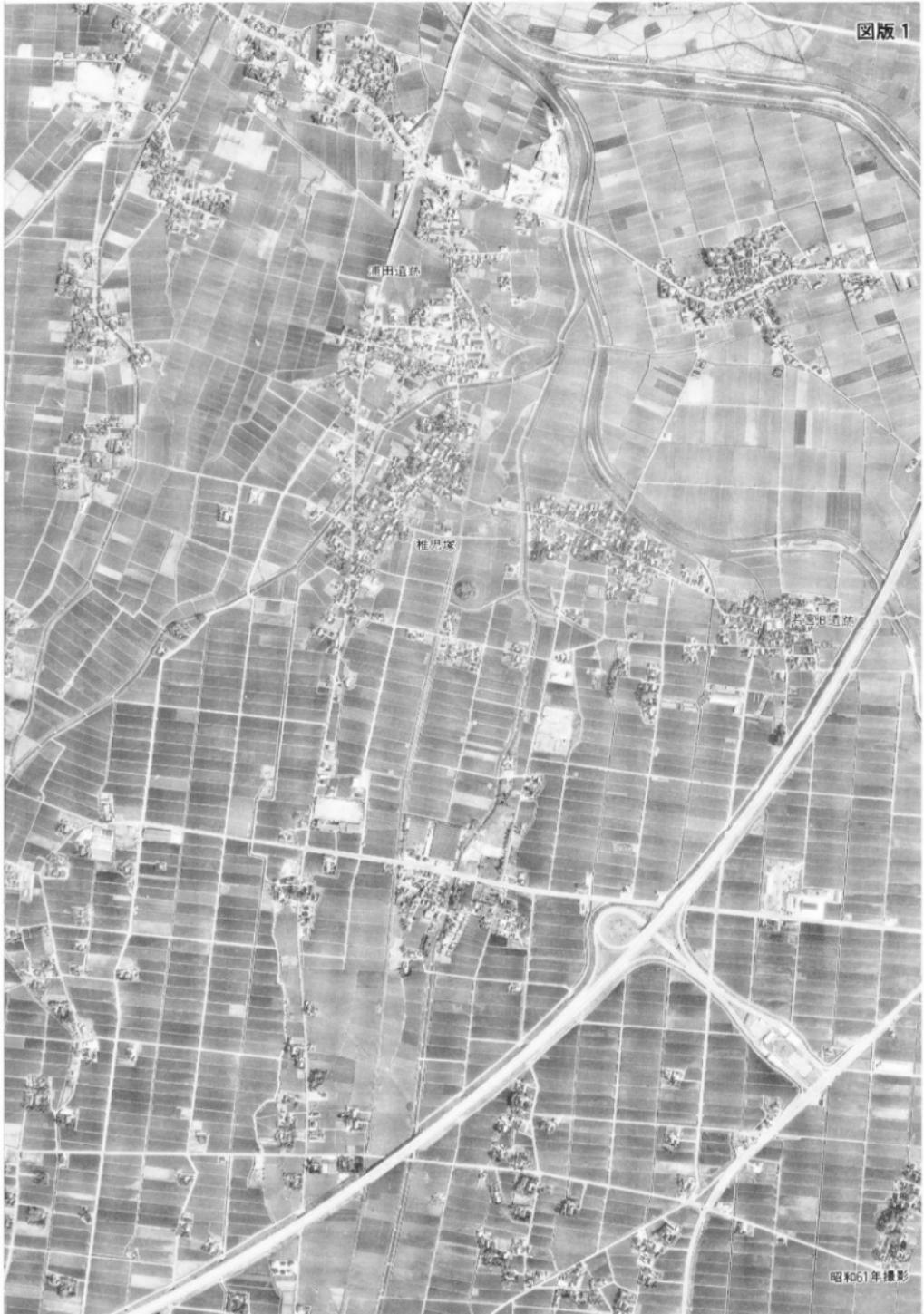
第6表① 昭和62・61年度出土弥生土器・古式土師器觀察表

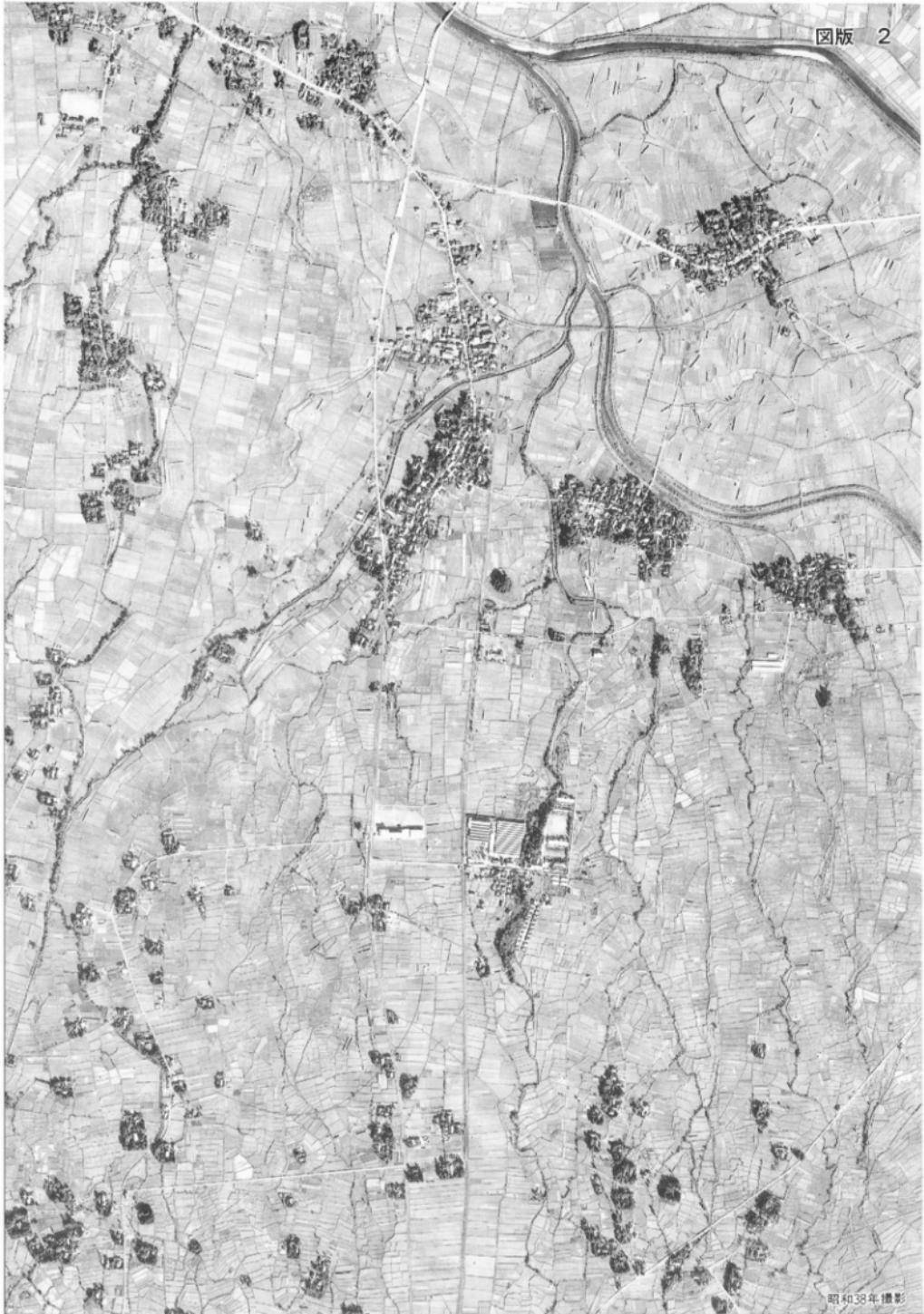
図 番 号	器種	出土位置	法量(cm)	口部類(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考
6	甕	穴-09	II段17.0	縦部: 植物による痕跡 内: メタリックな光沢 外: ハサメ	外: 鋼鉄色 内: ハサメのものちチヂ 内: ハサメのものちチヂ	中	赤褐色 中	良好	約1/8	
7	甕	XRY5.386	II段20.9	縦部: ハサメ 内: ハサメ	外: 鋼鉄色・ハサメ 内: ハサメ	中	赤褐色 中	良	約1/3	スヌ付着
8	甕	穴-05	II段21.1	縦部: ハサメのものちチヂ 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	該焼褐色 中	良	約1/3	
9	甕	穴-08 XRY6.386	II段23.0	縦部: 植物のものち表面に見える 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少 中	浅茶褐色 中	やや不良	約1/4	スヌ付着
10	甕	穴-06 XRY5.386	II段17.2	縦部: ハサメ・傳統文 内: メタリックな光沢	外: 鋼鉄色は2重の幾何状模様 内: ハサメ	少	赤・赤褐色 内: 深褐色	中や不良	約1/4	
11	甕	穴-09	II段17.1	縦部: 裂込み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	赤褐色 中	良好	約1/6	
12	甕	穴-05 XRY5.386	II段18.3	縦部: 小枝状 内: メタリックな光沢	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 中	良	約1/10	スヌ付着 付帯: 1/8
13	甕	穴-09	II段19.1	縦部: 刻み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	該焼褐色 中	良	約1/6	スヌ付着
14	甕	穴-08 XRY5.386	II段13.9	縦部: ハサメ 内: メタリックな光沢	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良好	約1/6	
15	甕	穴-09	II段16.1	縦部: 植物のものちチヂ 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 中	良	約1/6	付帯: 1/8
16	甕	穴-05 XRY5.386	II段20.7	縦部: 小枝状 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 中	良	約1/3	スヌ付着
17	甕	穴-08	II段28.0	縦部: 刻み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 内: 深褐色	良	約1/12	
18	甕	高-05	II段13.1 豊5.386	縦部: ハサメのものちコロナ 内: メタリックな光沢	外: ハサメ 内: ハサメ	中	赤褐色 中	良	約1/6	スヌ付着
19	甕	高-09	II段16.0	縦部: 刻み 内: メタリックな光沢	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良好	約1/3	
20	甕	高-05	II段10.4	縦部: 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少	赤褐色 中	良好	約1/3	スヌ付着
21	甕	穴-05	II段36.5	縦部: ハサメ 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少	赤褐色 中	良	約1/2	
22	甕	穴-09	II段37.3	縦部: ハサメ 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 中	良	約1/3	
23	甕	穴-09 XRY5.386	II段36.7	縦部: 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 中	良	約1/2	
24	甕	穴-09	II段39.3	縦部: 刻み	外: ハサメ 内: ハサメ	少	赤褐色 中	良好	約1/4	
25	甕	穴-09	II段40.6	縦部: 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 中	良	約1/2	スヌ付着
26	甕	高-08	II段39.2	縦部: 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少	該焼褐色 中	良	約1/4	
27	甕	穴-08 XRY5.386 Navy 1-2号	II段40.7	縦部: 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	赤褐色 内: 深褐色	良	約1/2	
28	甕	高-10	II段28.0	縦部: 植物のものち 内: メタリックな光沢 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	該焼褐色 中	良好	約1/8	
29	甕	穴-10 XRY5.386	II段17.0	縦部: ハサメ 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少	該焼褐色 中	良	約1/3	内外端部色相変化
30	甕	穴-09	II段44.7	縦部: ハサメ 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	該焼褐色 中	良	約1/2	
31	甕	穴-05 XRY5.386	II段11.6	縦部: 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	該焼褐色 中	良好	約1/3	内外端部色相変化
32	甕	穴-09	II段36.6	縦部: 小枝 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	該焼褐色 中	良	約1/2	
33	甕	XYY2.3号	II段10.0	縦部: 植物のものち 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	赤褐色 内: 深褐色	良	約1/6	
34	甕	穴-10	II段22.9 豊46.28.5	縦部: 植物のものち小枝状 内: メタリックな光沢 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少	該焼褐色 中	良	約1/12	
35	甕	穴-02	II段17.1	縦部: ハサメ 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少	該焼褐色 中	良	約1/2	
36	甕	穴-02 XRY5.386	II段18.1	縦部: 刻み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	多	該焼褐色 中	良好	約1/8	
37	甕	穴-05	II段20.0	縦部: 刻み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良好	約1/8	
38	甕	XRY5.386	II段19.0	縦部: 植物による痕跡 内: 鋼鉄文・創出・創出を施す 縦部: 鋼鉄文(2×18.0+1) 内: メタリックな光沢 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良好	約1/6	
39	甕	XYY3.3号	II段22.9 豊46.28.5	縦部: 鋼鉄文 内: ハサメ	外: 鋼鉄文 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良	約1/3	スヌ付着
40	甕	穴-05	II段26.0	縦部: 刻み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良好	約1/8	スヌ付着
41	甕	穴-05	II段23.1	縦部: 刻み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良	約1/3	
42	甕	XYY3.3号	II段22.2	縦部: 植物のものち 内: メタリックな光沢 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良	約1/8	
43	甕	XRY-2号	II段20.0	縦部: 刻み 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少 中	該焼褐色 中	良	約1/6	スヌ付着
44	甕	XRY5.1-2号	II段16.5	縦部: 刻み 内: メタリックな光沢 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	少 中	該焼褐色 中	良	約1/6	スヌ付着
45	甕	XYY4.3号	II段18.0	縦部: 刻み 内: メタリックな光沢 内: ハサメ	外: ハサメ 内: ハサメ	中	該焼褐色 中	良好	約1/8	スヌ付着

第6表② 昭和61年度出土弥生土器・古式土器観察表

器種	出上位置	法量(cm)	口頃部(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考
15 磁	XSY7-3脚	口径18.0	端面：丸筒状のち子口底 内：正コナド 外：正コナド	中 内：黒褐色 外：深灰褐色	黒	約1/4			
26 磁	XSY7-3脚 XSY7-3脚	口径17.0	内：正コナド 外：正コナド・ハケノ 内：ハケメ	多 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/8			
21 磁	XSY7-3脚	口径20.0	端面：丸筒状 内：正コナド 外：正コナドのちナデ 内：ハケメ・ナデ	多 内：正コナド 外：正コナドのちナデ 内：ハケメ・ナデ	淡赤褐色 白	良好 約1/6			
22 高杯	XSY7-3脚	口径18.0	外：正筒状の脚柱付高脚 内：正コナド 外：正コナド	多 内：正コナド 外：正コナド	淡灰褐色 白	約2/3			
23 磁	XSY4-3脚	口径6.1	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/8			
24 小形土器	XSY7-3脚	直径3.5	端面：ハゲメ 内：ナデメ 外：正コナド	中 内：ナデメ 外：正コナド	淡赤褐色 白	ほぼ完全 約1/2			基の可能性あり
25 高杯	XSY7-1-2脚	口径10.2	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	やや不良 約1/2			
26 高杯	XSY7-1-3脚	口径3.6	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/2			
27 有脚	XSY7-3脚	口径4.6	内：正コナド 外：正コナド	多 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
28 高杯	XSY7-1-3脚	口径7.0	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
29 高杯	XSY7-2脚	口径7.1	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			接地面の跡跡が判 いている
30 高杯	XTY2-1-2脚	口径7.0	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	やや不良 約2/3			
31 高杯	XSY8-3脚	口径5.9	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	不良 ほぼ完全 約1/2			
32 高杯	XSY7-3脚	口径5.6	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
33 高杯	XSY7-1-2脚	口径5.5	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナドのちナデ 外：正コナドのちナデ	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
34 高杯	XSY4-1-2脚	口径5.0	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
35 高杯	XSY7-2脚	口径6.1	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
36 高杯	XSY7-3脚	口径6.8	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
37 高杯	XSY9-3脚	口径7.0	内：正コナド 外：正コナド	多 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	やや不良 約1/2			
38 高杯	XSY9-3脚	口径4.5	内：正コナド 外：正コナド	多 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
39 高杯	XSY7-1-3脚	口径6.0	内：正コナド 外：正コナド	多 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
40 高杯	XSY7-3脚	口径5.8	内：正コナド 外：正コナド	多 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好完全 約1/2			
41 高杯	XSY7-3脚	口径7.3	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/2			接地面に壓痕有
42 高杯	XSY6-3脚	口径9.2	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	やや不良 約1/3			
43 磁	XSY7-3脚	口径14.2	外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナドのちヨコナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナドのちヨコナド	淡赤褐色 白	良好 約1/8			又穴有
44 磁	XSY3-1-2脚	口径17.5	内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナドのちヨコナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナドのちヨコナド	淡赤褐色 白	良好 約1/8			
45 磁	XSY3-3脚	口径15.0	外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナドのちヨコナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナドのちヨコナド	淡赤褐色 白	良好 約1/6			
46 磁	XSY7-5脚	口径16.4	外：正筒状にハゲメ 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナドのちヨコナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正筒状にハゲメ	淡赤褐色 白	良好 約1/3 相当：約1/3			又穴付
47 磁	XSY3-3脚	口径17.0	内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナドのちヨコナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/6			又穴付
48 磁	XSY3-1-2脚	口径19.2	外：正筒状にハゲメ 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナドのちヨコナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正筒状にハゲメ	淡赤褐色 白	良好 約1/8			
49 磁	XSY7-3脚 XSY9-3脚	口径16.7	外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド	多 内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/4			
50 磁	XSY2-1-2脚	口径18.2	内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナドのちヨコナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			接地面に壓痕有
51 高杯	XSY7-1-3脚 XSY7-1-3脚	口径17.2	外：正コナド 内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド	淡赤褐色 白	良好 相当：約1/6 相当：約1/6			相当内外部、脚部 外表面也剥落半失
52 高杯	XSY7-3脚 XSY7-3脚	口径17.1	外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド 外：正コナドのちヨコナド 内：正コナド	中 内：正コナドのちヨコナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/2			相当内外部、脚部 外表面也剥落半失
53 磁	XSY7-3脚	口径2.7	端面：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約2/3			
54 磁	XSY9-3脚	口径16.1.9	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/2			内外部也剥落半失
55 磁	XSY7-3脚	口径19.9.4	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
56 磁	XSY7-3脚	口径18.2	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
57 磁	XSY7-3脚	口径19.9.3	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
58 磁	XSY7-3脚	口径19.9.3	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
59 磁	XSY7-3脚	口径19.9.1	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約2/3			外表面也剥落半失
60 磁	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約2/3			外表面也剥落半失
61 高杯	XSY9-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/6			
62 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
63 磁	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
64 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
65 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
66 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
67 高杯	XSY9-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
68 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
69 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
70 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
71 高杯	XSY9-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
72 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
73 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
74 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
75 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
76 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
77 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
78 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
79 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	少 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
80 高杯	XSY7-3脚	口径19.9.0	内：正コナド 外：正コナド 内：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			
81 高杯	XSY8-3脚	口径5.0	内：正コナド 外：正コナド	中 内：正コナド 外：正コナド	淡赤褐色 白	良好 約1/3			

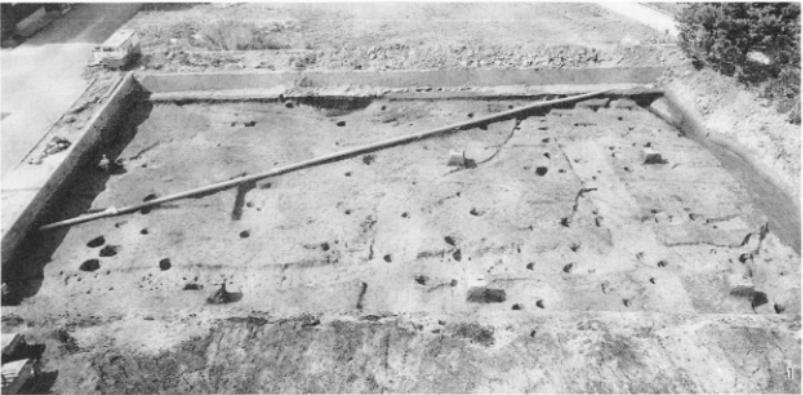
第6表③ 昭和61年度出土弥生土器・古式土器観察表





図版3

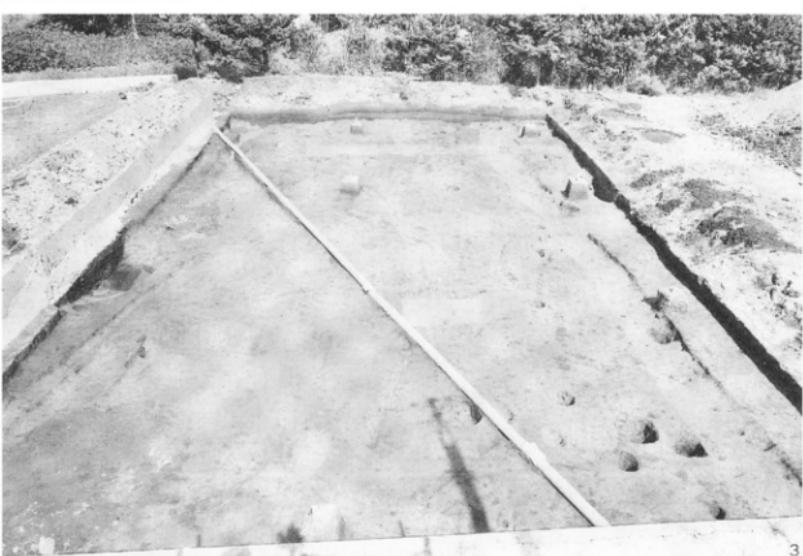
1.発掘区北側全景
(南から)



2.発掘区南側全景
(北から)



3.発掘区北側全景
(西から)

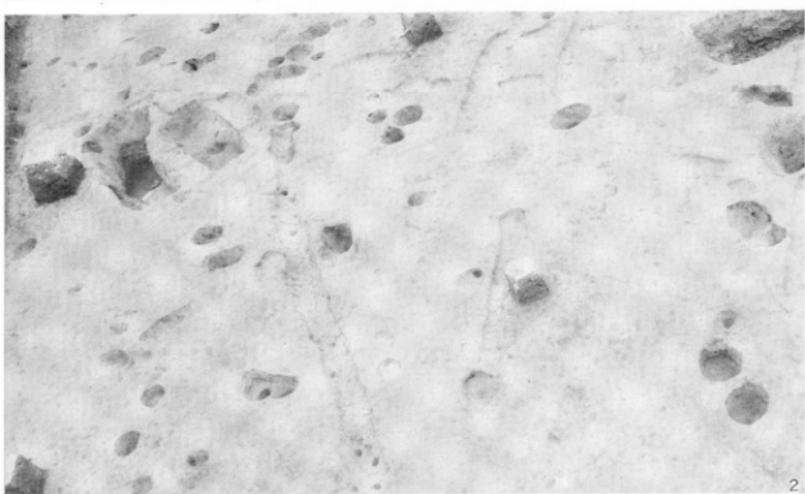


図版4

1.発掘区南側全景
(西から)



2. 摂立柱建物の
柱六群(西から)



3.溝-22遺物出土状況



4.作業風景



図版5

1. 满-22



1

2. 穴-17



2

3. 穴-103



3

4~6. 包含磨



4



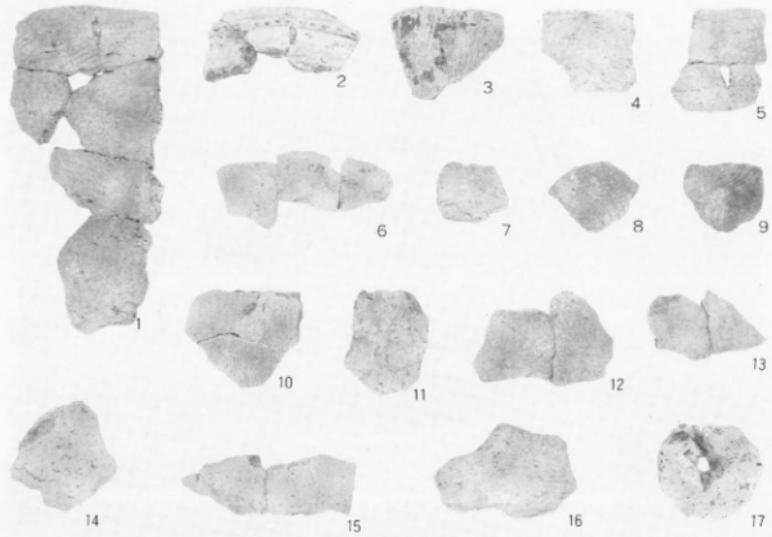
5

6

図版6

1・3-17. 包含層

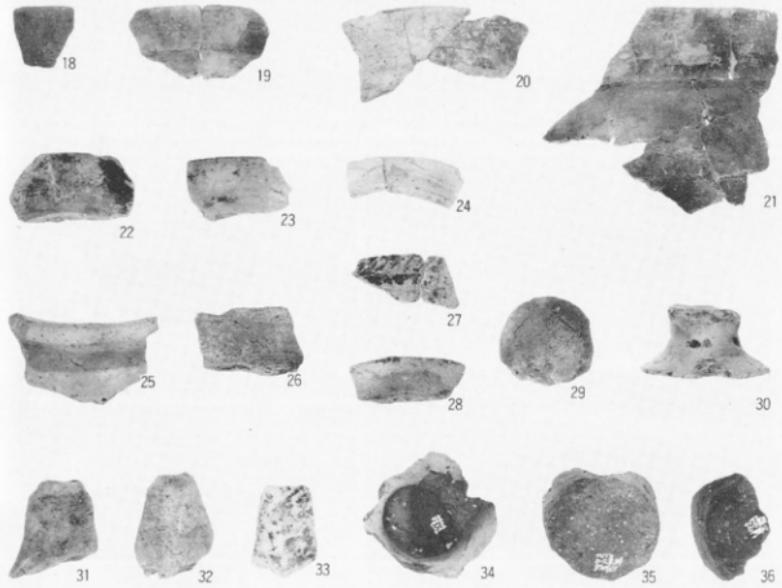
2. 溝-22



18-20・22-32・
34-36. 包含層

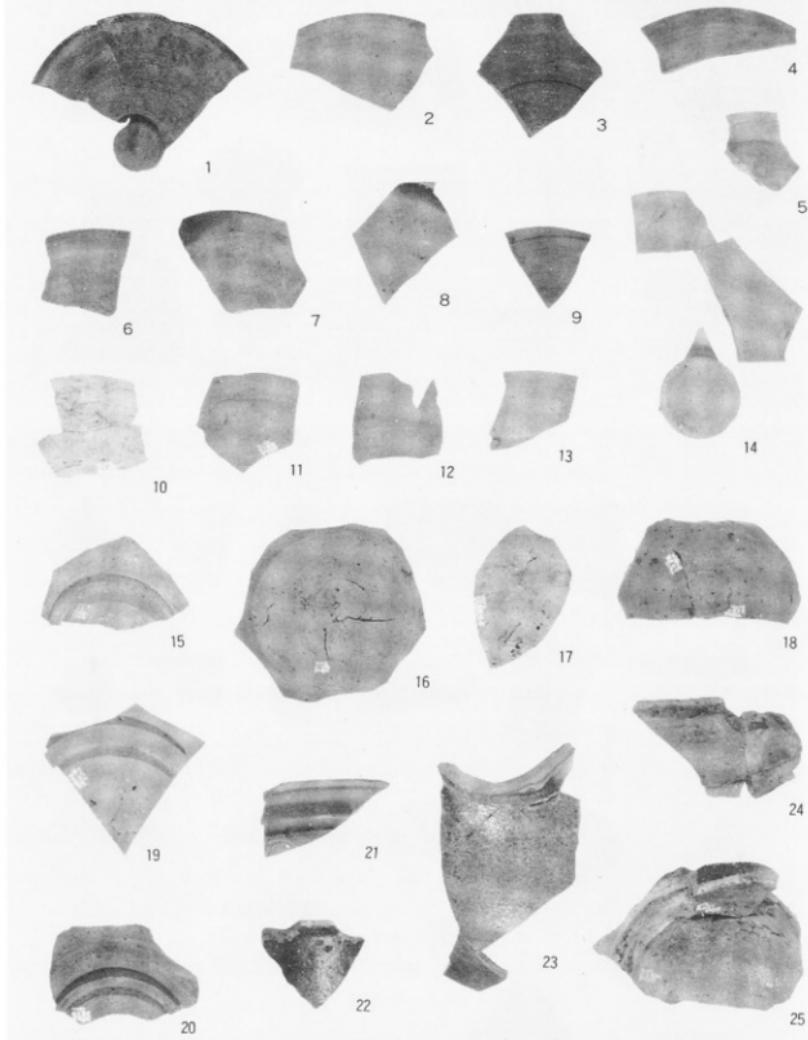
21. 穴-17

33. 溝-22

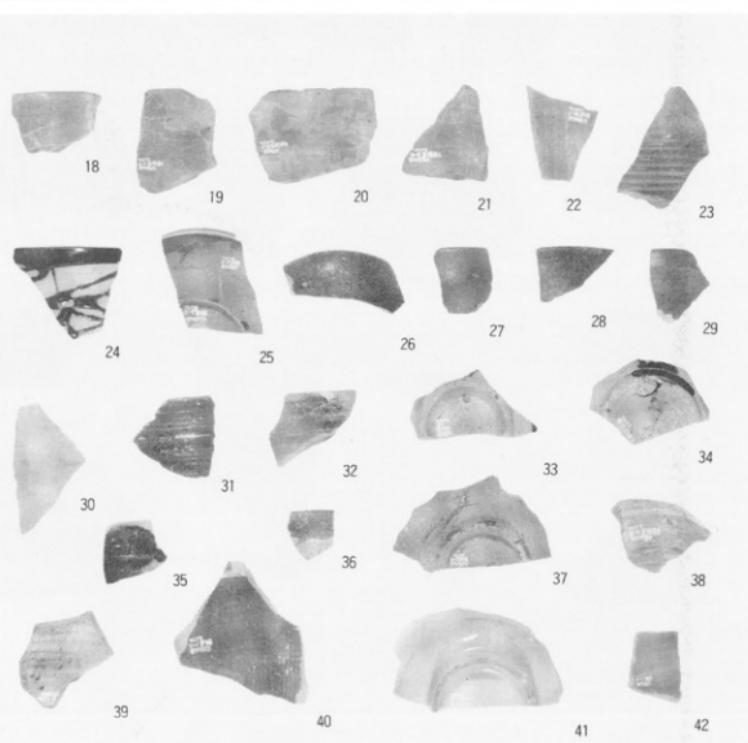
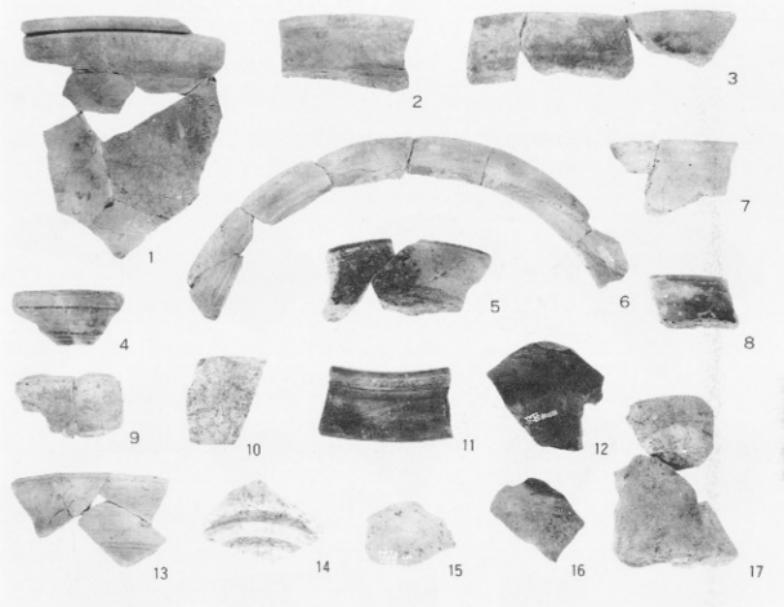


図版7

包含層



包含層



浦田遺跡

— 第2次発掘調査報告 —

立山町文化財調査報告書第6冊

発行日 昭和63年3月31日

編集 立山町教育委員会

発行 立山町教育委員会

印刷 日興印刷株式会社

